

# 「巫女の予言」にみる円環詩法と異人來訪のテーマ

水野知昭

一口に「巫女の予言」といっても複数の写本と異本が存し、(1) エッダ詩を集成した「王室写本」(62連)、(2)「ハック本」(59連)、および(3)『スノッリのエッダ』所収の「ギェルヴィの幻惑」に引用された30連と内容が紹介された16連、の三種に大別される<sup>1)</sup>。さらに(3)は、『スノッリのエッダ』を記載した「王室写本」、「ヴォルム写本」、「ウプサーラ写本」、および「トライェク写本」と称される四つの写本のほかに、「巫女の予言」数節を含む15世紀の断片(AM 756, 4to)がある<sup>2)</sup>。また、(1)と(2)はしばしば写本名の頭文字をとってR本、H本と略記されるが、しばしば対応箇所の語句や詩行が異なるばかりか、厄介なことに、とくに後半部において詩節の順序が相異している。通常はR本(1270年頃書記)が最重要視されているが、その反面、H本(14世紀半ばに書記)はR本に無い数節を含んでいる<sup>3)</sup>。さらにまた「巫女の予言」の原詩そのものは、口承の伝統を踏まえて紀元1000年前後に創作されたともいわれる<sup>4)</sup>。そこで学者たちは、いざ「巫女の予言」の刊本を編集するとなると、相互の写本で異なる表記をいかに解決するか、またその際にどの異本を重んじるか、詩節をどのような順序で並べるか、などの考証を重ねてきた。

ここではVöluspá「巫女の予言」詩人がどのように円環詩法(Ring Composition)を駆使しているかを検討することを目的としているので、上記(1)の「王室写本」の詩節番号と順序をそのまま踏襲したアースラ・ドロンケの刊本に依拠した<sup>5)</sup>。ただし綴り字の校訂は基本的にグズニ・ヨーンソンに従った<sup>6)</sup>。なお、別稿において円環詩法を次のように説明した。

…(前略)…詩歌の中のあるまとまった「詩連」(a series)において、

最初の要素と最後の要素が「共鳴」し、最初の要素に後続する次の要素が、最後の要素に先行する要素と「共鳴」といった体裁をもっており、いわば一種の「交差対句法」(chiasmatic design)を成していることが認められる。そしてしばしば、これらの共鳴する要素が、当該の詩連の中で、「中心的な要素としての役割りを有するひとつの中核」(X)を取り巻くように配列され、全体として[A-B-C…X…C-B-A]という形式を有している<sup>7)</sup>。このような特徴が、「円環詩法」(ring composition)と名づけられているのである。[なお]、ジョン・D・ナイルズが、相互の詩的要素が「共鳴する」(echo)という言い方をしているのは、ジョン・O・ピーティの所論(1934)に基づいている<sup>8)</sup>。そして周知のように、「円環詩法」は当初、W・ファン・オッテルロー(1944)によって古代ギリシアのホメーロスの叙事詩に認められることが指摘され<sup>9)</sup>、セドリク・ホイットマン(1958)やスティーン・パートマン(1966)その他によって<sup>10)</sup>、[関連の]詩論が発展してきた(拙論2003)<sup>11)</sup>。

その拙論でも紹介したように、円環詩法は元来1940年代の半ば～60年代にかけて、ホメーロスの詩作法に認められたものであるが、70年代の後半にH・W・トンズフェルトやジョン・ナイルズによって<sup>12)</sup>、『ベアオウルフ』を初めとする古英詩の構成にも適用され、斯学の注目を浴びるにいたった。ただし、幾つかの方法論上の難点があって、例えば、詩歌の中で繰り返されるモチーフを「単語や語句」ととどめるか、あるいは「複数の語句や主題」にまで拡大するかという議論があり<sup>13)</sup>、しばしば提唱者のナイルズの定義は曖昧に過ぎるという批判も出されてきた(拙稿参照)<sup>14)</sup>。

さて、寡聞にして私は、エッダ詩にも円環詩法が認められることを正面切って論じた学者を知らない<sup>15)</sup>。前稿ではその実験的な試みとして「ヴォルンドの歌」を分析してみたところ、詩歌の前半と後半において表現要素が対応し、例外はあるものの比較的きれいな円環を構成していることが分かった(拙論参照)。【鍛冶師ヴォルンドによる王子殺害】の語りが本詩の中核の主題(いわゆ

るXを太字の鉤括弧で示す) をなしていることも明白になった<sup>16)</sup>。

そこで今回は、解釈上しばしば難解な詩句や詩行を含む「巫女の予言」について、円環詩法の有無を検証してみることにした。前回と同様に分析の際に、対応する表現要素は基本的に詩句に限定することにして、一重の鉤括弧[ ]でそれを示し、詩歌の前半部と後半部に対応・共鳴する要素を、順番に[A] - [B] - [C]…[C] - [B] - [A]と記号化してゆくことにした。ただし、想像していた以上に対応詩句が多く、つづいて [a] - [b] - [c]などの小文字も動員せざるを得なくなった。繰返しになるが、本稿は「巫女の予言」の原詩に円環詩法が用いられていたことを検証することを目的としている。そのため、詩節番号と順序は「王室写本」を基本とした前述のアースラ・ドロムケの刊本に従ったので、G・ネッケルとH・クーン版を踏襲された谷口幸男氏の邦訳本の詩節番号と異なることに留意されたい<sup>17)</sup>。

## I. 詩歌全体の外枠：「語り」と「沈黙」

さて「巫女の予言」の場合、詩歌の外枠を形成する表現要素は、まさに冒頭の1節と最終の62節に認められる。

(1) [A] <u>Hljóðs bið ek allar</u>	<u>静粛をわたしは求めたい、</u>
helgar kindir,	あらゆる尊 <sup>うから</sup> き族、
meiri ok minni	身分の高き者も低き者も、
mögu Heimdallar;	ひとしくヘイムダッルの末裔なる者よ。
viltu, at ek, Valföðr,	戦死者の父よ、汝は望む、
<u>vel fyr telja</u>	<u>このわたしが巧みに語るようにと、</u>
<u>form spjöll fira,</u>	覚えているかぎり昔にさかのぼり
<u>pau er fremst of man.</u> <sup>18)</sup>	<u>命ある者らの古言<sup>ふるごと</sup>をはじめよと</u> <sup>19)</sup> 。

ここでいう「古言」(form spjöll) は、「まさにフルコトであり、古くからの言い伝え、いにしえの歌、そして繰り返し言いフル(「経る」に通ず)されて

きた事柄である」、などと定義づけをした（拙著『生と死の北欧神話』20：以下略記『生と死』<sup>20)</sup>。また、そのような古言の語り手である「わたし」がしばしば「かの女」と呼ばれていることについて次のように説いた。

ek「わたし」はこの詩歌の「発話者」としての「巫女」をさしているが、詩人と巫女が同一人物である必要はない。…（中略）…いわばひとりの女性シャーマンとしての巫女は、過去・現在・未来の時空的な領域を靈的に遍歴しつつ、聴衆にその中で「見たり、聞いたりしたこと」、あるいは「覚えていること」、そして時には遠方を見晴るかすその眼差しの彼方に「見えてくること」を語り上げているのである。否、そのような「巫女のすがた」を、我ら読者（広義での「聴衆」）のために現前化させているのは、男性であるかもしれぬ「詩人自身」であろう。

したがって「わたし」(ek)と自称する巫女が、同じ詩歌のなかで三人称の「かの女」(hon)と呼ばれる場合があるのも理會できる。この試訳では、巫女をさすときには「かの女」と訳し、それ以外の女性をさす場合の三人称は、これを峻別するために「彼女」と訳出することにした。…（中略）…この詩歌の「語り手」として造型された巫女が、過去または未来の靈的空間に潜入し、その中の超自然的な出来事にそのまなざしと意識が局限されたとき、自称なる「わたし」は「かの女」という存在者に變貌をとげるかに見える。さらには、そのように「わたし」から遊離していった「かの女」を、どこか醒めた眼でみつめている詩人が作品の背後にひそんでいる（拙稿「『巫女の予言』抄訳と略註」：以下、「略註」<sup>21)</sup>）。

巫女はまず始めに、ヘイムダッルを始祖神と仰ぐ聴衆たちにhljóð「静粛」すなわち「沈黙」を求め、次にヴァルフォズル「戦死者の父」と称されたオージンの要請に応じて、みずから「命ある者らの古言」を語り出すことを言明している。興味深いことに、hljóðは両義的で、「沈黙」とは正反対の「騒音」や

「叫び、唸り声」の意味もある。巫女の口から発せられた「静粛に」という要請が、ただちに呪文や祈祷あるいは予言の「声調」にあたかも転化していったかのである。こうして巫女は悠遠なる過去に遡りながらも、そこから紡ぎ出される未来の出来事をも予見し、滅びゆく神々の定め、そして世界の没落と新世界の再生までを語りあげ、最後には次の歌をもって吟詠を終えているのである。

(62) Par kemr inn dimmi	そこへ聞なす竜が
dreki fljúgandi,	空を飛んでくる、
naðr fránn, neðan	その蛇身はきらめき、
frá Niðafjöllum;	ニザフィオル(「暗月の丘」)の下方から昇りくる。
berr sér í fjöðrum,	翼に死骸をのせて
—flýgr völl yfir,—	ニズホッグなる竜は
Niðhöggr nái.	激戦の野の上を飛びゆく。

[A] Nú mun hon sökkvask さて、かの女は沈みゆかん。

まずは、この最終詩節についてほどこした註釈の一部を引いておく。

……そもそも「かの女」すなわち巫女は、ヴァルフォズル「戦死者の父」と称されたオージンの神威をまとして「古言」を語り（1節）、それを基点として数々の予言を提示してきたのだが、「かの女は沈みゆかん」という最後のフレーズをもって、語りを突如として中断している。…（中略）…闇夜について飛び行く竜の出現を語ったのを最期に、巫女なる「かの女」は、地平のかなたに「沈みゆかん」という言葉を残して、聴衆そして我らの前から姿を消していった。あたかも巫女自身が満ち欠けする月の形相を映し出しているかのようにあり、この世の生と死を司る運命のことを熟知しているかにも見える（「略註」53）。

加えて別稿において、ニズホッグ「新月（暗夜）をもって切り払うもの」という名の飛竜の出現は、ふるき「時代」（veröld）の撥無を意味すると同時に、神々が滅び去った後の新たなる「世界」（同じくveröld）の幕開け、すなわち「月立ち」としての「朔」を表徴していると説いた。そして、巫女自身が、盈虚を繰り返す月の形相を映しつつ、「この世」（古ノルド語veröldと古英語werold）の生と死と運命を司る女神フリッグ（予言神オージンの妻）の相貌を帯びていると結論づけた<sup>22)</sup>。ちなみに古英語werold（現代英語のworld）は古ノルド語veröldと同系で、wer「人間」とald「時代、流れる時、生、世代」から成る複合語で、「人がある時代を生き、老いてゆきながらも次々と世代が生まれ代わる領域」がその原義であった（拙論参照）<sup>23)</sup>。

したがって、聴衆に「静粛」を求め、「古言」を「巧みに語るように」という詩神オージンの要請をうけて語り始めた1節と、「（巫女なる）かの女は沈みゆかん」という言句をもって語りの終わりを宣した最終62節は、「生と死と運命および月にまつわる古代思想」を根本主題とする詩歌全体の外縁の枠組み（outer frame）を形成していると言えよう。すなわち最初に、聴衆に「沈黙」を求めた巫女は、語るべき言葉を次々に発して、ついに最後には、みずからの役目を終えて「沈黙」の世界へと埋没していったのである。

さて、上記で「激戦の野」の訳語を与えたvöllrの用例を検証すると、ほとんど常に「激闘、流血、死」のニュアンスを伴っている<sup>24)</sup>。ここでは、ラグナロクいわゆる「神々の滅びゆく定め」の語りを終え、また世界が再生することを予言した後の描写であるから、ヴォッル「激戦の野」は、神々と魔の軍勢が死闘を繰り返してひろげた、ヴィーグリーズという名の戦場をさしている（「ヴァフスルーズニル」18）<sup>25)</sup>。この戦場の名前Vígriðrそれ自身が「死闘の野原」を意味していた<sup>26)</sup>。魔の軍勢が襲来してくるとき、ヘイムダッルは「あらん限りの力で角笛ギャラルホルンを吹き鳴らし、すべての神々を覚醒させ」て、危機の発生を告げ知らせるという。その激戦のさなか、グングニルという槍を手

に、オージンは先陣を切って闘うが、フェンリル狼に呑み込まれてしまい、一方、ヘイムダッルはロキと戦い、両者相討ちで果てることが予言されている（「ギユルヴィ」51）。

さて、「巫女の予言」27節によれば、ヘイムダッルの角笛は、かかる緊急事態の発生する以前には、「聖なる樹の下に隠されてある」というのだが、注目すべきことに、その角笛をさすのに先述の *hljóð* の用語が充てられている。すでに近稿でも論及したが、この場合のフリーズは、「響き聞こえるもの」、「奏音」または「（ヘイムダッルの鋭敏な）聴覚」を意味しながらも、然る時まで隠されたまま「沈黙を強いられたもの」、という諧謔的な意味が込められている（近稿参照）<sup>27</sup>）。

このように一連の語りを通観すると、「巫女の予言」1節において「始祖神」ヘイムダッルと「戦死者の父」オージンの名を併記しているのは、最終62節と相関関係を打ち立てるためであったことが分かる。いわば *hljóð* 「沈黙」させられたのは、聴衆ばかりではなかった。これら両神は、「神々の滅びゆく定め」すなわちラグナロクの予言を完結する巫女と同様に、然るべき役割を終えて、相次いで地平の彼方に「沈みゆく」存在であることが早くも冒頭で暗示されているのだ。

## II. 世界・領域・住み処・「住む」と「育てる」・樹木

- |                       |  |
|-----------------------|--|
| (2) Ek man jötna      | わたしは覚えている、かの昔に                                       |
| [B] ár of borna,      | 生まれし巨人たちを、   |
| þá er forðum mik      | 過ぎし日々わたしを  |
| [C] fædda höfðu;      | 養い育てた者たちのことを。  |
| [D] níu man ek heima, | わたしは覚えている、九つの <sup>ニク</sup> 世界の <sup>ニク</sup> ことを、   |
| nú íviði (íviðjur),   | 大地の奥処にて  |
| [E] mjötvíð mæran     | 九つの <sup>イ</sup> 領域 <sup>ニク</sup> に張る根(九人の女巨人たち)のこと、 |
| fyr mold neðan.       | つとに名高き <sup>イ</sup> 推し量る <sup>ニク</sup> 樹のことを。        |

- (60) Pá kná Hænir                      そこでヘーニルは  
 [E] hlautvið kjósa                    卜占の枝を選ぶことになり、  
 [B・C] ok burir byggja                二兄弟の息子たちが  
           bræðra tveggja                    風の住み処に広々と  
 [D] vindheim víðan.                    住まうことになる。  
 Vituð ér enn—eða hvat?   おのおの方、さらに知るや、それとも如何に？

2節の最初の4行では巫女はおのれの生い立ちを語り、後半では「シャーマニズム的な体験」を語っているとされる<sup>28)</sup>。「かの昔に生まれし巨人たち」とかの女を「養い育ててくれた」巨人たちについての記憶から、さらには「大地の奥に」存在する九つのheimar「領域」に思いを馳せている。「九つの領域(heimar)」についての記述は「ヴァフスルーズニルの語り」(43節)にも認められ、「すべての世界」の語句と同格に置かれており、死後の世界はニヴルヘル(Niflhel)と呼ばれていた。拙著で次の説明を与えておいた。

「ギェルヴィの幻惑」によると、大地が創られるよりもはるか昔に、ニヴルヘイム(「霧または暗闇の世界」の意)が成り立ち、やがてその「真ん中」にフヴェルゲルミルという泉ができあがったという。…(中略)…ニヴルヘイムは、冥府のニヴルヘルと本来は区別されていたが、後代にはしばしば混同されたとみられる。というのは、ロキの娘ヘルは「大災難と不幸」を招くものとみなされ、オージンによってニヴルヘイムに投げ込まれ、「九つの世界」を支配するように仕向けられたと記されているが(「ギェルヴィ」34)、その一方では、「九つの世界を巡歴して、ヘルから降った死者が宿るニヴルヘルにまで下降した」という記述も見えるからである(「ヴァフスルーズニル」43)。これら二つの資料を付き合わせると、ニヴルヘイムとニヴルヘルが地下の最奥部の世界として同一視されていたと言



える（『生と死』46-47）。

2節のmjötviðr「推し量る樹」は、トネリコの世界樹ユグドラシルをさしているというのが一般の解釈である<sup>29)</sup>。ただし、「グリーンニルの語り」31節や「ギルヴィの幻惑」15章では三つの世界に根を張るとされ、上の記述と矛盾をきたしている。たとえば前者の記録によれば、ユグドラシルのトネリコは、「三つの方角 (vega) に向けて三つの根を張っている」とされ、「一つの根の下にはヘル (冥府女神) が住み、二つめの根の下には霜巨人族、第三の根の下には人間の種族が住みついている」と記されてある。ところが後者の記伝では、「はるか遠くまで伸びている」三つの根のうち、「一つめはアース神のところへ達し、第二は霜巨人たちのところへ達していて、そこにはかつてギヌンガガブがあった」とされ、「第三のものはニヴルヘイム (Niflheimr) の上に伸びていて、その根の下にフヴェルゲルミル (泉) があり、ニズホッグ (竜) が下方からその根を齧っている」という（「ギルヴィ」15）。このように三つの根について記された順番は異なるが、「第三の根の下に」住む「人間の種族」（「グリーンニル」31）と「一つめの根」が伸びた「アース神のところ」（「ギルヴィ」15）は対応するだろう。ここで「人間の種族」と訳出したmennskir mennは、「人の姿をした神々」の意にも解しうるからである。さらには、世界樹の「根の下」に異なる種族の「居住地」がある、という着想をここで確認しておきたい。その一つの根の下に「ヘル (冥府女神) が住む」という表現は、言い換えると、「病死した者や老衰であの世に逝った者たち」（「ギルヴィ」34）などの死者がそこに「住んでいる」（búa）ことを暗示している。上述したように、ニヴルヘイムは「ヘルから降った死者が宿るニヴルヘル」としばしば混同され、地下の最奥部に位置する幽冥界として思い描かれていた。したがって記述の順序は異なるが、第一の根が達していたヘル（「グリーンニル」31）と第三の根の領域ニヴルヘル（「ギルヴィ」15）は明確な対応を示す。

三つの根がアースの神々、霜巨人たち、そしてニヴルヘイムにそれぞれ伸び

ていると記された後に、「そのトネリコの第三の根は天にとどき、その根の下にウルザル・ブルンと呼ばれる、殊のほか神聖なる泉がある」という矛盾めいた記述が置かれている（「ギュルヴィ」15）。あわせて、「そこに神々は裁きの座を有している」とされ、「アースたちは毎日、馬に乗ってビヴロストの天橋を渡ってゆく」という（『生と死』219）。一方では、ユグドラシルの「枝葉」(limar) は「すべての領域(heimar)に伸び広がって天の上にもとどいている」と記されている（「ギュルヴィ」15）。いずれにせよ、天空にそびえ立つ世界樹の「枝葉」の下に思い描かれた特定の居住空間とおよそパラレルな関係をもって、そのトネリコの「根の下」に、神々あるいはmennskir menn「人の姿をした者たち」、霜巨人族、そしてヘルまたはニヴルヘルに堕ちていった死者たちが、それぞれ「住む」領域がある、という古北欧の世界観を想定できるだろう。

さて、巫女は遠き過去を回想して、「大地の奥」の九つのheimar「領域」について触れているが、いわばそれらは、「つとに名高き推し量る樹」の根の下にある、「人の姿をした」神々や人間、巨人、侏儒、妖精など、その他ここでは明記されていない特定の種族がそれぞれ住まう「全世界」をさしている。先述したように「九つの領域」は「すべての世界」と同義であったからである（「ヴァフスルーズニル」43）。したがって「巫女の予言」2節は、60節「二兄弟の息子たちが風の住み処に広々と住まうことになる」という表現形式と明らかに対応している。ここでは「二兄弟」は匿名だが、先行59節でホズとバルドルの復活が歌われているので、この両者をさしているのだろうか。また vindheimr「風の住み処」という用語も一見奇妙だが、やはり59節の記述に従い、「戦士の神々の聖域」と称された「フロフト (Hroptすなわちオージン)の勝利の地」の暗喩と考えておきたい。いずれにしても、vindheimr「風の住み処」の第二要素heimrは「住み処」、「領域」、「領地」、「この世」、「世界」などの複合的意味をもつが、「二兄弟の息子たち」が「住まう」(byggja) ための特定の占有地をさしている。2節のheimar「世界（領域）」と60節のvind-heimr

「風の住み処」が対応するのはもはや明らかだ（要素 [D]）。当然、これらの名詞と、それぞれ *foeda* 「養い育てる」と *byggja* 「住む」（要素 [C]）が相互に関連している。

「過ぎし日々」に、今は巫女である「わたし」を「養い育て」てくれたのは「巨人たち」であったという追憶（2節）は、神々の滅びをまねくラグナロクの後に、「二兄弟の息子たちが風の住み処に広々と住まうことになる」（60節）という未来の予言と共鳴し、語りの円環を形成している。ちなみに *burir* 「息子たち」の単数は *burr* で、原古の巨人ユミルを殺害したオージン、ヴィリ、ヴェーの三兄弟、すなわち「*Burr*（別名 *Borr*）の息子たち」をただちに連想させる。*Burr* は普通名詞で「息子」の意だが、「生まれくる者」がその原義である（『生と死』57）。当然のことだが、*borinn* 「生まれる」（2節）は *bera* 「生む」の過去分詞で、*burr* 「息子」（複数 *burin* : 60節）もその派生語である<sup>30</sup>。「過ぎし日々」に、「巨人たち」の「娘」のように育てられた「わたし」（*mik*）も同じ表現要素に該当するだろう。[息子・娘・末裔]を一括りにして要素 [B] としておく。

2節6行目の *íviði* をハック本に従って *íviðjur* 「（九人の）女巨人」と読むべきか否かについては解釈が分かれている。ちなみにシーグルズル・ノルダルは前者を採用して「トネリコの根の枝」と解しているが<sup>31</sup>、近稿において、空間的かつ時間的な複合的解釈が可能だと説いた<sup>32</sup>。複合語 *mjötviðr* の第2要素 *viðr* は古英語 *wudu*（または *widu*）と同系で「樹木」を意味し、第一要素 *mjöt* は動詞 *meta* 「測る」から派生した名詞と考えられている<sup>33</sup>。

ユグドラシルの「第三の根は天界（*himinn*）に伸び広がっており」、その根の下にウルザル・プルン「運命の泉」があって、神々は毎日その場所で *dómar* 「数々の裁き」を下すという（「ギユルヴィ」15：『生と死』219）。したがって *mjötviðr* はそのように「運命を押し量る」ための *helgi-staðr* 「聖域」としての「樹木」を意味しているだろう。いずれにせよ2節では、世界の中心に位置する *viðr* 「樹木」と、広がりわたる *retr* 「根」の神話的な着想を基本にし

て、上述したように特定の種族が「住む」ためのheimr「領域」が思い描かれている。

まさしく同一の連合が60節でも働いている。いわゆるラグナロクの後の記述だが、かつて世界樹の「第三の根」が伸び広がっていたはずの天界は、vindheimr「風の住まう領域(国)」と呼ばれ、ヘーニルという神がその危難を生きのびて、ト占のviðr「樹木」を選び取るとされる。なぜこの神がここに登場しているかは不明だが、ロキがvinr Hœnis「ヘーニルの友」と称されていたことからすれば(「ハウストロング」3 & 7)、「世界の没落」を招いた張本人としてのロキとは対照的に、ヘーニルは新たな世界を始動させる働きをしているとみなしうる。

異教の犠牲祭に執心するシグルズ侯のエピソードが記された「ハーコン善王のサガ」(14章)を参照されたい(『ヘイムスクリングラ』)<sup>34)</sup>。場所はノルウェー北部のトロンヘイム、犠牲祭の時節の到来ともなれば、農民たちが食物をもって異教の神殿に集まって来る。この祝宴においては参加者全員がエール酒を飲んだとされる。馬を含めたいろいろな家畜が犠牲にされ、血はhlaut「供犠の血」、また「供犠の血を撒く小枝」はhlaut-teinnと呼ばれた。その小枝を用いて、偶像の台座や神殿の壁の内側と外側など、いたる所に血を撒き、また塗りと記されている<sup>35)</sup>。したがってヘーニルが手にした hlaut-viðr「ト占の枝」は、犠牲祭に供用された hlaut-teinn「供犠の枝」と類似した機能を果たすものとみなしうる。多分にヘーニルが選び取ったその「供犠の枝」によって、「二兄弟の息子たち」がbyggja「住む」ことになる vindheimr「風の住み処」が祓い清められたのだろう。

いずれにせよ、2節と60節のheimr「領域」(要素[D])とviðr「樹木」(要素[E])が、緊密に連合する表現要素として円環の外縁部を構成していることは疑い得ない。ある「領域」がheimr「居住地」として確定されれば、当然その地に「住む」または「育てる」という表現(要素[C])を惹き起し、ひいては息子・娘など「子孫・未裔」(要素[B])が栄えゆくheimr「故郷、故地、また

は広義での世界」の概念を醸成するのは理の必然である。

### III. 海・大地・天・緑（草）

- (3) Ár var alda, 悠遠なる時の始め  
[C] þar er Ymir byggði, ユミルが居を構えたころ、  
[F] vara-a sandr né sær 砂も海も無かった  
né svalar unnir; 冷たき波も無かった  
[G] jörð fannsk æva 大地はどこにも見えず  
[H] né upphiminn, 上なる天も無かった、  
gap var ginnunga, 在りしはギヌンガ・ガブ  
[I] en gras hvergi されど草はいずこにも無かった。
- (56) Sér hon upp koma かの女は見る、  
öðru sinni 海中よりふたたび  
[G・F] jörð ór ægi とこしえに緑なす  
[I] iðjagræna; 大地が浮かびくるを。  
falla forsar, 滝はたぎり落ち、  
[H] flýgr örn yfir, 山に棲まう  
sá er á fjalli 鷲が上空を飛び、  
fiska veiðir. 魚を狙う。

3節では、世界が創成される以前の原初の渾沌を歌い上げている。sær「海」も jörð「大地」もこの世に現われてはおらず、upp-himinn「上なる天」も無かったときに、太虚ギヌンガガブのみがあったとされる（『生と死』60-62）。「海」、「大地」、および「上天」という宇宙を構成する基本領域を、それぞれ表現要素 [F]、[G]、[H] に分類しておくが、いずれもいまだ非存在として言及されている。ましてや、「大地」に生い茂る gras「草」（要素 [I]）は「いず

こにも無かった」と歌われている。この渾沌期に、巨人ユミルのみが「居を構えていた（住んでいた）」というのはいかにも奇妙である。しかしbyggja「住む」という動詞は、上記の60節にも用いられ、また2節「養い育てる」はその“variant”であったことに想到すれば、疑問の一部は氷解する。以下、基本となる表現要素から派生した概念語を「変異型」(variant)と呼ぶことにする。たとえば56節では、「草」の変異型としてidja-grænn「とこしえに緑なす」が表れている<sup>36)</sup>。

ユミルは、ギヌンガガブに滴るkviku-dropi「いのちの水滴」によって生を享け(『生と死』54-56)、霜巨人の始祖となるが、やがてオージン、ヴィリ、ヴェーの三兄弟神によって殺される運命にあった。そしてユミルの遺体が神話的宇宙の「中核」に位置するギヌンガガブに運ばれ(『生と死』60)、それを原点として天地と海が創成されている。三兄弟神、いわばBorrまたはBurr(「息子」の意)の息子たちによる巨人殺害が、天地創成という大なる偉業を導いたことになる。したがって60節に、二兄弟のburir「息子たち」という用語が置かれていることはすこぶる象徴的だ。「二兄弟の息子たちが風の住み処に広々と“住まう”(byggja)ことになる」(60節)という表現において、「二兄弟」は先行詩節59のホズとバルドルをさすと解されている<sup>37)</sup>。ラグナロクの後、死界から蘇ってきたバルドルとホズのburir「息子たち」が天界の然るべき場所にbyggja「住む」ことを開始するとき(要素[C])、滅び去った世界が新生することを物語っている。すなわち56節において、ægir「海中」よりふたたび「とこしえに緑なす」jörð「大地」が浮かびあがってくる、と歌われているように。

「海」、「大地」、「上天」、および「草」がすべて非存在であったという3節の記述と対照をなし、56節では、新生をとげた世界において、これらの要素の再生が活写的に描き出されている。「とこしえに緑なす」は、先述したように、3節の「草」(要素 [I])の変異語であり、鷲が「上空を飛ぶ」という描写は、「上天」(要素 [H])に対応している。



[C・D・G] の複合概念であるともいえる (『生と死』58-9)。

4節2行目のbjöð「土塊」という語は、ドロムケによれば、その他五つの用例から推して、「海の傍らにあるか、もしくは海から隆起してくる土地」をさす詩語であったとされる<sup>38)</sup>。原古の巨人ユミルのhold「肉」から「大地」が造られるという神話には(「グリーンニル」40)、死せる者の「肉塊」と「土塊」との強烈なアナロジーが潜んでいる、と説いたことがある<sup>39)</sup>。「プルの息子たち」いわゆる三組神がこの「土塊」をyppa「持ち上げる」という行為が大地の創成を導いている。いわば「海中から大地が」の変型的モチーフだろう。拙著で次のような説明を与えた。

…(前略)…ミズガルズ(Miðgarðr)は、「世界の中心」に位置する人間の居住地である。3節の虚無なる時代とはうって変わって、大地に降りそそぐ陽光と生い育つ「緑の草」が描かれている。「草」はlaukrと表記され、薬草、より厳密には「大蒜」を意味している。ニンニクは豊饒と幸運のシンボルであると同時に、災厄を撃退すると信じられていた<sup>40)</sup>。…(中略)…いずれにせよ、上の詩歌において、創成された人間世界ミズガルズを守護するものとして「緑の草」を思い描くべきだろう。注目すべきことに、生命の根源地としての「地表」(grund)と草が「生育する」(gróa)さまを示す動詞、そして豊饒の色としての「緑」(grœnn)が頭韻を踏んでいる(『生と死』45)。

4節の「南より太陽が輝き、館の石を照らす」という表現は、「太陽よりもうるわしく、黄金に葺かれた館」がギムレーに建つという61節の表現と対応している。いわば「海中から大地が」(要素[G・F])のイメージを引きずりながら、sól「太陽」とsalr「館」の連想を打ち立て(要素[J・K])、「緑の草」(要素[I])がgróa「生育し繁茂する」さまを描いている。緑の草が「繁茂する」に対応する表現要素は次の59節にも認められ、「種まかずとも」穀物はvaxa「育



つ」だろうと記されている。

(59) Munu ósánir

種まかずとも

[L] akrar vaxa,

穀物は育つだろう—

böls mun alls batna,

ありとある災厄が吉に転じよう、

Baldr mun koma;

バルドルは来たらん。

[C] búa þeir Höðr ok Baldr

彼らホズとバルドルは、

[L] Hropts sigtóptir

戦死者の神々の聖域なる

[M] vé yaltíva.

フロフトの勝利の地に住む。

Vituoð er enn — eða hvat? おのおの方、さらに知るや、それとも如何に？

バルドルとホズがかつての敵対関係を解消して、フロフトの sig-tóptir 「勝利の地」に平和に búa 「住む」とされる (要素 [C])。Hroptr は「呪言・託宣の神」の意で、オージンの別名である。バルドルの冥界下降とその蘇生は、「種まかずとも穀物は育つだろう」と歌われているように、大地に緑なす豊饒力がよみがえることを象徴している。バルドルと、その仇敵であったホズの蘇生、それは積年の敵意と不和の解消を象徴し、ラグナロクにおける多くの犠牲によって、「平和と豊饒」の時代が再来することが予言されている(『生と死』314)。上の詩歌では、穀物が「育つ」ことと災厄が batna 「吉に転ずる」ことが平行関係に置かれ、ひいては sig 「勝利」の概念をも導いているように見える。「豊饒・勝利・平和」を要素 [L] として定位しておいた方がよさそうだ。というのも、すでに詳説したように、「豊饒と平和」は、ヴァン神族の主神ニョルズと息子フレイが司る密接不可分な特性であったからである (水野1998) <sup>41)</sup>。

そうすると先の61節で、「真正なる戦士たち」が死後、至上天のギムレーに「住み」、とこしえに享受する yndi 「至福」(幸福と快楽)は、要素 [L] の変異型と考えられる<sup>42)</sup>。ラグナロクのとて、魔物スルトによって世界が焼き尽くされ、天と地が滅び去っても、ギムレーのみは不滅だという (『ギョルヴィ』

17)。「すぐれて勇敢にして信義あつき人」のみが選ばれて赴く天の楽園を表象している（『生と死』226）。59節の「戦死者の神々」と61節の「真正なる（または有徳の）戦士たち」の語句は、したがって緊密に対応している（要素 [M]）。いわば選りすぐった戦士のみが、至上天のギムレーに召され、永遠の「至福」に授かることと相関的に、ホズとバルドルは「すぐれた戦士」として選り出され（『生と死』205）、冥府からの復活をはたし、かつてオージンが治めた「フロフトの勝利の地」に住む至福を得ることになるのだ<sup>43</sup>）。

## V. 太陽・月・星々

(5) [J] <u>Sól</u> varp sunnan,	空をゆく <u>月</u> の友輩 <sup>ともがら</sup> なる
[N] <u>sinni mána</u> ,	太陽が、南より
hendi inni hægr	天の縁のまわりに
[H] um <u>himinjöður</u> ;	その右手を投げかけた。
sól þat né vissi,	太陽には知る由もなかった、
[J・K] hvar <u>hon sali átti</u> ,	おのれが何処 <sup>いずこ</sup> に館をかまえるかを。
[O] <u>stjörnur</u> þat né vissu,	星々には知る由もなかった、
hvar þær staði áttu.	おのれたちが何処にとどまるべきかを。
[N] <u>máni</u> þat né vissi,	月には知る由もなかった、
hvat hann <u>megins átti</u> ,	おのれの持てる力が如何なるものかを。

4節と61節に対応例がみられた「太陽と館」の連想法は、5節に継承されている（要素 [J・K]）。さらに「天の縁」という要素[H]の変異型が見られるが、その連想は容易い。従来、後半行については疑問が投げかけられてきた。たとえばU・ドロンケは、5-10行について「前後の脈絡がよくない」ことを根拠に、「この部分は原詩には無かった」と判断している<sup>44</sup>）。しかし、「星々には知る由もなかった、おのれたちが何処にとどまるべきかを」という表現は、54節の「天からは輝く星々が消え失せる」と明らかに対応しており、太陽が

「天の縁のまわりにその右手を投げかけた」という表現は、「太陽が黒ずみ」(54節)という言い回しと対照をなす。詩人が円環詩法を駆使していると考えれば、5節5-10行を原詩から絶対に除外するわけにはいかない。上記の「王室写本」とは異なり、「スノッリのエッダ」写本では、8-10行において、「星々」と「月」に関するそれぞれ二行が入れ替わっており、S・ノルダルはその方が本来の順序とみなし、その場合、星々に関する最終二行は「真っ先に省かれてしかるべき」と断言している<sup>45)</sup>。だが、上述の円環詩法の見地に立てば、この説も成立しえないと思う。

太陽が「何処に館をかまえるか」、星々が「何処にとどまるべきか」(直訳すれば「場所を占める」)を、それぞれ「知る由もなかった」という表現の意味内容はよく似ている。それに対して、月についてのみ、「おのれの持てる力が如何なるものかを」知らなかったと記され、語りの口調が明らかに異なり、格別の趣意が払われている。ここでいうmegin「力」は、「秘められた魔力」を意味している。すでに卑見を示したように、この世の生と死と運命を支配する月の「魔力」という古来の信仰または思想が、「巫女の予言」の語りの底流に脈打っている<sup>46)</sup>。したがって上記の後半の詩行において、擬人化された太陽、星々、そして月が、それぞれ自分の「館」、「占めるべき場所」、および「持てる力」を知らない、という語りの連続の中で、やはり「月の魔力」にまつわる示唆的な二行が詩節の最終に置かれて然るべきだろう。そこで、máni「月」を要素[N]、stjörnur「星々」を要素 [O] に区分しておく。太陽に与えられた sinni mána「空をゆく月の友輩」または「月の旅仲間」という呼称は、天を運行する両者の不可分な関係を想定できる。月と太陽は、同じMundilfari (または-fœri) を父とする兄妹とされるが(「ヴァフスルーズニル」23 & 「ギェルヴィ」11)、その父についての詳しい伝承は残されていない(但し、拙論参照<sup>47)</sup>)。

(54) [J] Sól tér sortna.      太陽が黒ずみ

- [G・F] sígr fold í mar, 大地が海中に没する、  
 [H] hverfa af himni 天からは輝く星々が  
 [O] heiðar stjörnur; 消え失せる。  
       geisar eimi 火煙といのち育む<sup>ほむら</sup>炎は  
 [P] ok aldmari, 猛りたち、  
       leikr hár hiti 熱火が高々と舞い  
 [H] við himin sjalfan. 天そのものと戯れる。

既述したように、54節の「太陽が黒ずみ」は、4節の「南より太陽が輝き」および5節「太陽が南より天の縁のまわりにその右手を投げかけた」の表現と好対照をなす。そして、「大地が海中に没する」という表現は、「ブルの息子たちが土塊を持ち上げた」（4節）という天地創成の語りと対照をなし、加えて、「海中よりふたたびとこしえに緑なす大地が浮かびくる」（56節）という、ラグナロク後の新しい世界の創成の語りとも共鳴している（要素 [G・F]）。54節に、太陽と星々の消滅を語る言葉があるのに、月に関する直接的言及がないので対応が不完全ではある。

## VI. 支配神・来臨する・裁きの座

- (6)[Q・R] Pá gengu regin öll そこで支配神たちは、  
 [S] á rökstóla, いとも神聖なる神々は、  
       ginnheilög goð, みなひとしく裁きの座に赴き、  
       ok um þat gættusk; その一件で協議をかさねた。  
       nátt ok niðjum 夜とその子孫たちに  
       nöfn of gáfu, 名を与え、  
       morgin hétu 朝と真昼  
       ok miðjan dag, 午後と夕べに  
       ndorn ok aftan, 名を与えて、

árum at telja. 年月を数えられるようにした。

[62H][Q・R] Pá kemr inn ríki そのとき、かの強大なるもの

[S] at regindómi 力猛きものが上天より

öflugr ofan, 崇高な裁きの庭に降りてくる、

sá er öllu ræðr. それは万物を支配する方だ。

6節の前半4行「そこで支配神たちは、いとも神聖なる神々は、みなひとしく裁きの座に赴き、その一件で協議をかさねた」という表現は、9節、23節、25節の前半行でも繰り返されている。しかし円環詩法の観点からみれば、「ハック本」に掲載された62H節が照応するだろう。ただし、「ハック本」のみに記されたこの四行詩を、「巫女の予言」の刊本に挿入すべきか否かについては大きく議論が分かれている。たとえば、写本相互の時代考証を進めたシーグルズル・ノルダルは、この詩行は12世紀の初め頃には「巫女の予言」の中の、「ハック本」に位置を占めていたと結論づけている<sup>48)</sup>。その一方、K・フォン・ゼーのように、62H節は、「北欧神話の終末論の意味内容とは無縁で、純然たるキリスト教的な所産」であり<sup>49)</sup>、「巫女の予言」の原テキストには存在しなかったと主張する学者も多い。だが、rök-stóll「裁きの座」にganga「赴く、やって来る」異教の神々と、regindómr「崇高な裁きの座」に上天よりkoma「降りてくる」主なる神が、対応することは一目瞭然である。あわせてregin「支配神」やginnheilög goð「いとも神聖なる神々」という表現句（6節）は、inn ríki「かの強大なるもの」（62H節）と対応するものも自明であろう。いわば「支配神」（要素[Q]）が「来臨して」（要素[R]）、「裁きの座」（要素[S]）に就くという共通の主題が歌いこまれているが、複数の異教の神々（6節）とキリスト教の唯一神（62H節）の来訪、という意図的な対照関係が打ち立てられているようだ。

「力猛き」と訳出した原語は、人間創成に関与した三神の形容詞と同じ

öflugrだが（17節）、ここではあたかもキリスト教の唯一絶対神を表わすかの  
ように単数である。その意味では、これを後代の所産とみるドロンケなどの推  
定に傾聴すべきかもしれない。しかし、この詩行は「ヒュンドラの詠歌」44  
節（または「巫女の予言短詩」最終15節）と意味内容において共通した響き  
があるのも事実だ。

そのとき、さらに別の  
強大なる方がやって来る、  
わたしは敢えてその名を  
あげることはしないが。  
オージンが狼と  
対決することになるが、  
いまやそれよりも遠くまで  
見通す者はほとんど居まい。

（「ヒュンドラの詠歌」44）

オージンと狼が「対決する」という言句は、来るべきラグナロクをさしてい  
る。いわば神々が滅び去るあとの世界を「見通す」ことは誰にもほとんど不可  
能だと語る一方、前半四行で、「さらに別の強大なる方」の出現を予言してい  
る。この匿名の神は、前後の文脈から考えて、キリストではなく、ヘイムダッ  
ルをさすという説もあるが<sup>50)</sup>、依然として決着がついていないようにみえる。

一般に「巫女の予言」は、キリスト教が浸透しはじめる10世紀末から11世  
紀初頭に生きた詩人によって創作されたとされるが<sup>51)</sup>、14世紀の前半に記録  
された「ハウク本」の编者（Haukr Erlendsson：1334年没）にとっても、なお  
古来の円環詩法が意識されていたことを示している。いずれにせよ方法論上、  
上記の要素 [Q・R・S] を統合して、新たに「神々の会議」の表現要素 [T]  
を設けておいた方がよさそうだ。というのも、この要素 [T] が、続く7節で  
はÍðavöllr という名の「聖なる野」に集う神々のモチーフに変異 (variantion)

させられているからである。

## VII. 神々が邂逅する・イザヴォッルの「野」

- (7) [T] Hittusk æsir      アースたちは  
[U] á Iðavelli,      イザヴォッルに邂逅し、  
þeir er hörg ok hof 祭壇と神殿を  
háttimbruðu;      壮大に築きあげ、  
afla lögðu,      幾つもの鍛冶場をもうけ、  
auð smíðuðu,      宝物を鍛えあげ、  
tangir skópu      <sup>やっこ</sup>金銑を造り、  
ok tól gerðu.      そして数ある道具を仕上げた。
- (57) [T] Finnask æsir      アースたちは  
[U] á Iðavelli      イザヴォッルに邂逅し、  
ok um moldþinur      そして力猛き  
máttkan dæma      大地の帯（ミズガルズ蛇）のことを語らう。  
ok minnaz þar      そこで思い出されるのは、  
[V] á megindóma      畏怖すべき運命的な出来事、  
ok á Fimbultýs      そしてフィムブル・テュール（偉大なる神オージ  
ン）の  
[V] fornar rúnir.      古き秘蹟のことども。

イザヴォッルの意味については、「光輝の野」、「活動の野」、または「絶え間なく再生される野」など、種々の説が提示されてきたが<sup>52)</sup>、この第二要素völlr「野」の各用例を調べると、血で血を洗うような「激闘の野」の意味合いがあることが分かった（拙論参照）<sup>53)</sup>。「祭壇と神殿」を築き、さらに鍛冶場をもうけて道具を作ったというからには、アース神たちは霊的に世界を支配するた

めの活動と労働を開始したと読める（「略註」32）。この野に集ったアースたちが「祭壇と神殿を壮大に築きあげ、幾つもの鍛冶場をもうけ、宝物を鍛えあげ」たと記され（7節）、労働にいそむ様子が描かれている。まさに同じく57節では、アースたちがイザヴォッルに「集結する」とき、それはかつて天地創成をなしとげた神々の所作を、「ラグナロクを生きのびた者たち」が模倣することを意味している。拙著で命名したように「語りの円環構造」の典型例である（『生と死』313-15）。

「神々が邂逅する」場所が、ほかならぬイザヴォッルという「神聖なる野」（要素 [U]）であるという共通の主題は、先述した「神々の会議」（要素 [T]）の変異型とみなしうる。ラグナロクを生き残るアースたち、あるいはその後に冥府から蘇生したバルドルやホズたちが（『生と死』313-5）、数々の megindómar 「畏怖すべき運命的な出来事」を想起するとき、神話的な時間は始原のときに回帰してゆくことになるだろう。というのも、その時、彼らはフイムブル・テュール（「偉大なオージン」）が語った「古き秘蹟」を「思い出す」というのだが、fomar rúnir 「古き秘蹟」の数々は、オージンの求めに応じて巫女自身が語り出した forn spjöll 「古言」（1節）とほとんど類義的であるから。

先述したごとく megindómar の第一要素 megin は、月に「秘められた魔力」（5節）の意味で用いられていた。この用語は dómar 「数々の運命的な裁き」と不可分な関係に置かれており、その「古き秘蹟」を告知する者が予言神オージンあるいはその神威を身にまとった巫女と考えられていたように思える。その意義を重視して、生と死と運命を支配する月の「魔力」とそれにまつわる「古言と予言」のモチーフを要素 [V] に一括しておこう。

神々といえども、神殿の建築その他の労働の後には、休息または「気晴らし」（skemtun）が必要だ。そこで次のような詩節が続く（『生と死』209）。

## VIII. 草地・黄金の駒・ゲーム・異人たちの来訪

(8) [W] Tefldu í túni,      彼らは聖なる草地にて盤戯に打ち興じた。



	teitir váru,	一たのしみ熱中した一
	var þeim vettergis	彼らにとり <u>黄金製</u> のものに
[X]	vant ór gulli,	不足することはなかった。
	unz þrjár kvámu	<u>おそろしく頑強な</u>
[Y]	þursa meyjar	<u>三人の巨人の娘たちが</u> ,
	ámáttkar mjök	ヨトゥンヘイム (巨人の国) から
	ór Jötunheimum.	<u>やって来るまでは</u> 。
(58)	þar munu eftir	そこでふたたび
	undrsamligar	<u>草むらのなかに</u>
[X]	gullnar töflur	不可思議な
[W]	í grasi finnask,	<u>黄金のチェス駒が見出されよう</u> ,
	þærs í árdaga	それらは過ぎし昔に
	áttar höfðu.	神の族 <sup>うから</sup> の持てしもの。

アースラ・ドロンケによれば、神々のチェス遊びは、「もろもろの出来事を遠隔操作すること」を意味しており、この場合、「天体の運行によって、世界の前途洋々なる運命を維持するための儀礼的なゲーム」であると解し、「そのゲームの戦闘的な要素は、卜占より発達したものであろう」と注釈を与えている(『生と死』210)<sup>54</sup>。この説を承けて拙著で次のような補説を加えた。

レジス・ポワイエの訳著によれば、トゥーン (草地) について、「囲われた不可侵の牧草地」と定義されている。ヴァイキング時代には、農場の「母屋の入り口前方に広がり、馬、牛、あるいはとくに冬至の祝祭 (ヨール) に犠牲として捧げられた豚などの家畜を飼育した」とされる<sup>55</sup>。このトゥーン (tún) がドイツ語 Zaun 「囲い、柵」や英語 town 「町」(古義は「囲われた村落」) と同系であることは、よく知られている。「黄金製のも

のに不足することはなかった」と記された、まさに黄金時代において、神々は盤戯に熱中していた。それに先立ち、彼らは、すでに「祭壇と神域」(7節)を築いていたのであるから、その神聖なる場所にて犠牲祭をも執行したのだろう。しかし、「おそろしく頑強な、三人の巨人の娘たち」が、「不可侵の牧草地」(トゥーン)に侵入してきたとき、原古の樂園時代はまさに終焉を告げることになった、と読める(『生と死』211)。

この8節が後半部の58節に対応することは明らかだ。「草むらのなか」から「黄金のチェス駒」が見出されたというのも、神聖なるトゥーンにて神々が盤戯に打ち興じ、黄金製のものに不足することがなかった(8節)、というあの黄金時代に語りが連結されてゆくことを意味している(『生と死』314)。神々が「聖なる草地」にてtefla「盤戯に打ち興じた」ことと(8節)、ラグナロクを生きのびた神々がgras「草むら」の中に黄金のtóflur「チェス駒」(tafla「チェス(またはチェッカー)の卓盤」の複数)を見つけたという記述(58節)は明確に対応している。「黄金」または「黄金の駒」を要素[X]としておく。「聖なる野イザヴォールでの神々の邂逅」を歌った7節と、8節の「草地での神々の盤戯」(要素[W])のテーマが、völlr「野」とtún「草地」の聖性を媒介にして連結され、同時に詩歌の後半部57-58節と緊密に対応・共鳴し、円環を構成している。ただし、8節の「三人の女巨人の来訪」に該当するモチーフは、少なくとも54-62節には見当たらない。「おそろしく頑強な」という形容句からしても、黄金時代を終焉させた「恐るべき異人たち」の来訪(要素[Y])として、より広義に捉えた方がよさそうだ。ここで仮定した要素[Y]の対応例は、同心円状の円環構造の内部においても数回認められる。あたかも詩歌の中核の主題に潜入するための導きの糸であるかのような。

## IX. 神々の会議・侏儒の創成と没落

(9) [Q] そこで支配神たちは, (10) こうしてモーズソグニルが



う。端的には、次節にみるように、「人によく似た姿」をした多くの侏儒を造るという神々の創造行為を導いている（水野2004）<sup>56)</sup>。

10節については、jörð「土」（要素 [G]）を用いてmann-líkan「人の似姿」をした侏儒たちを「数多くこしらえた」、という記述に着目しておこう。創成神の名は明示されていないが、あたかも人間の創成（17-18節）のための予備的な作業に参与しているかに見える（「略註」34）。神々による「侏儒の創成」を要素 [Z] に分類しておく。「イーヴァルディの息子たち」やブロックとシンドリの兄弟など、侏儒は鍛冶屋の特性を有する者として描かれている<sup>57)</sup>。その意味では「鍛冶場をもうけ、宝物を鍛えあげ、<sup>わつとこ</sup>金鉄を造り」（7節）という語りとの連続性を有する。一般に10-16節の侏儒の系譜（pula）は、後代に挿入付加されたとも説かれ、少なくとも1節が原詩から脱落したとされる<sup>58)</sup>。いわゆる「原詩」の作者は、卑見によれば、円環詩法に則っていたと推定しうる。これを前提にすると、49節を除けば、詩歌の後半部で侏儒に関する詩節が見当らないので、その解釈は妥当であるように見える。

「岩壁の領有者なる侏儒<sup>こびと</sup>たちは、岩の扉の前にてうめき声を発する」という詩行は、前後の脈絡からみて、9-10節の「侏儒の創成」とはまさに正反対の「侏儒の没落」を物語っている。要素 [Z] の変異型と言えようか。またveggberg「岩壁」やsteinn-dyrr「岩の扉」は、単に侏儒の「隠れ処」を暗示するだけでなく、侏儒を創成した素材（10節）としての「土」（要素 [G]）に対応すると思う。神々が「裁きの座」について「協議をかさねた」ことを語る、例の4行から成るリフレイン（要素 [Q・R・S]）が、ここでは「アース神たちは会議の席につく」という1行に短縮されている。迫りくるラグナロクを前にして、緊急に召集された神々の最後のþing「会議」（要素 [T]）であるかにみえる。

## X. 三人の異神たちの来訪・海の木・人間の創成・世界の滅び

続く17節の「これらの“種族”または“集団”(lip)」について、シーグルズル・ノルダルは、4節の「ブルの息子たち」と7節「アース神たち」をさすとして解しているが<sup>59)</sup>、その場合、三名のアース神たちが「アース神たちを離れて」旅立ち、「とある家(居宅)をめざして進み出た」、という一文は読解不能をきたすと思う。「これらの種族」はやはり侏儒族をさすとみなすべきだろう。

- |                               |                          |
|-------------------------------|--------------------------|
| (17) Unz þrír kvámu           | <u>これらの種族を離れて、</u>       |
| [Y] ör því liði               | ついには <u>三名の力猛き、</u>      |
| öflgir ok ástkir              | そして恵み深き <u>アース神たちが</u>   |
| æsir at húsi,                 | とある家を <u>めざして進み出た。</u>   |
| [F] fundu á landi             | <u>陸(海の辺)にて</u> 彼らは、     |
| lítt megandi                  | <u>アスクとエムブラ</u> という      |
| [E] Ask ok Emblu              | <u>力弱きもの</u>             |
| [V] örlöglausa.               | <u>運命を知らぬもの</u> を見出した。   |
|                               |                          |
| (48) [E・F] Kjöll ferr austan, | 船が東より渡りくる、               |
| koma munu Muspells            | <u>ムスペルの民が</u>           |
| of lög lýðir,                 | <u>海をこえて来る</u> だろう、      |
| en Loki stýrir;               | そして <u>ロキが舵取り</u> をつとめる。 |
| fara fíflmegir                | 荒れずさぶ者どもが                |
| með freka allir,              | 狼とともに総がかりで <u>攻め寄せる、</u> |
| [Y] þeim er bróðir            | <u>ビューレイストの兄弟</u> も      |
| Þýleists í för.               | その遠征に <u>加わっている。</u>     |

17-18節によれば、アスクとエムブラという最初の人間を創成したのはオージン、ヘーニルおよびローズルの三神であった。ところが、「ギェルヴィの幻惑」9章では、Borrの息子たち、すなわちオージン、ヴィリ、ヴェーの三兄

弟がsævar strönd「海辺」を歩んでいたときに見つけた二本の木からAskr（トネリコ）とEmbla（榦か？）という名の男女を創成したとされる。異伝の語りの相似性を重視すれば、17節5行目のlandも同じく「海辺」と解しうる（拙稿参照）<sup>60</sup>。アースたちは、「とある家をめぐす」旅の途上で、「力弱きもの」としての木々を見出したのだ。ちょうどヘイムダッル神も、まずはsjóvarströnd「海辺」をさすらった後に、人里を訪れ、奴隷、農民、王侯の始祖となったという神話と相似的である（水野1998）<sup>61</sup>。リーグと名乗ったヘイムダッルが最初に訪れた夫婦の「家」がhús（「リーグの物語歌」2）、二番目の夫婦の「屋敷」がhöll（同14節）、そして三番目の夫婦の「館」がsalr（26節）と表記され、後になるほど夫婦は裕福であり、それぞれの居宅にて奴隷、農民、侯の始祖が誕生している。17節4行目のhúsについて、ドロクケは一種のprolepsis「予期的賓辞」とみなし、「やがて住むことになる土地」を表徴していると解しているが<sup>62</sup>、如何であろうか。少なくともそれは、人間の始祖としてのアスクとエムブラが住むことが予定されている「比較的質素な家」（hús）ではあっても、「神の住む館」（höllやsalr）の意味ではあるまい。

48節2行目の用語を、ムスペルと長母音で読んだ場合には「口舌による滅び」を意味し、ムスペルと短母音で読めば、「世界の滅び」の意味になる。ちなみにシグルズル・ノルダルその他は前者を採用し、アースラ・ドロクケその他は後者の読みを採っている<sup>63</sup>。拙著ではMuspellと読む後者の説に従い、次のように縷説した。

原初るとき、南方には炎熱世界としてのムスペル（「世界の滅び」の意）が在ったとされ、スルト（「黒きもの」という魔性の者）がその領域を守護しているという。最終的には、「炎の燃え立つ剣」を手にしたこの者が神々を滅ぼし、世界をすべて火で焼き尽くす、と予言的に語られている。…（中略）…ムスペルという名の語源を「口による滅び」（その場合、ムーズスペル）と解し、南方から次第に浸透してくるキリスト教の「説

教」によって、異教の神々が滅ぼされることを暗示している、と解する学者がいる<sup>64</sup>。実に興味深い説ではある。ここではムスベッルは領域名だが、「ムスベッルの民」（「巫女の予言」48）あるいは「ムスベッルの息子たち」（「ロキの口論」42）という語句があることからすれば、個人名または集団名にもなりえたとみえる。神々を滅ぼす「ムスベッルの民」を率いる水先案内をつとめる者はロキであることが予言的に語られている。…（中略）… [なお、ビューレイストは「嵐を起こすもの」または「嵐と稲妻」の意に解されているが<sup>65</sup>、特定の神話が残されていないのでその正体は不明である。ヘルプリンディ（「冥府における盲目の者」の意）とともにロキをふくめた三兄弟を構成している。主神オージン、ヴィリ、ヴェーの三兄弟と本来はより明確な対照をなしていた可能性がある（『生と死』50-53）。

最後の一文を添えた根拠は、協同で巨人ユミルを殺して宇宙を創成した三兄弟神がオージン、ヴィリ、ヴェーであるのと対照的に、ロキが「盲目」のホズを唆してバルドル殺しを実現し、最終的にビューレイスト、ヘルプリンディとともに三兄弟が出揃うことによって世界の滅びをまねく大勢力となったという語りを想定できるからである。その場合、「盲目」のホズは、ヘルプリンディ「冥府の盲者」の名と対応し、またバルドルとの結婚を望んだ狩猟女神スカジ（「闇と死」の意）の特性を反映し、加えて、バルドル殺害の悲劇を見たときに胸中に「損害、災難」（scaði）を看取した「片目」のオージンの神威を投影している、と説いた（『生と死』306）。

一般に、「ビューレイストの兄弟」（48節）はロキと同定されているが<sup>66</sup>、上記の卑見に立てば、オージンやホズとの共通特性が認められるヘルプリンディをさすと解した方がはるかに合理的となる。「これらの種族（侏儒たち）を離れて」旅立った三名のアース神が、海辺に漂着した流木から最初の間を創成した話と、ロキが「舵取りをつとめる」船に乗って、「ムスベッルの民」が神々や人間を滅ぼす軍勢となって「海をこえて来るだろう」という予言は、明

確な相関関係に置かれうる。侏儒の lið 「種族」(14と17節)とムスベッルの lyðir 「民」(lyðr の複数)の意味的対応に加えて、ここでロキが先導を務めている kjóll 「船」は、詩作上の常套表現として「海の木」(古ノルド語 sæ-tré 古英語 sæ-wudu)と捉え直すことができる(拙論参照)<sup>67)</sup>。したがって、魔の軍勢を乗せた「海の木」なる船が、「海辺の流木」(要素[E・F])から創成された人間の種族を滅ぼすという神話は実に皮肉めいている。いわば、船によるムスベッルの軍勢の襲来は、人間創成神話のアンチテーゼの意味を有し、結合要素[E・F]の変異型と解しうる。

そして、öflgir 「力猛き」三名のアース神の遍歴を語る17節と、ロキをふくむ「三兄弟」とその一統の tíflme gir 「荒れすさぶ者ども」の襲来を告げる48節は、詩歌のなかで円環を構成していることは疑いない。前者のグループは人間の創成に関与し、後者の集団は神々と人間の種族を葬り去るべく出現している。先述したように、黄金時代の終焉を導く「三人の女巨人の来訪」と同一の図式に基づいており、広義での「三名の異人(または異神)の来訪」(要素[Y])の変異型と解しえよう。生と死、または創造と破壊の神話的テーマは、拙著でも繰り返したように、表裏一体であったからである(『生と死』274-75その他)<sup>68)</sup>。興味深いことにロキ自身が、「ムスベッルの息子たち(synir)」がミュルクヴィズ(「暗き森」)を馬に乗って襲来することを予言しているが(「ロキの口論」42)、これも構造的には「ボッルの息子たち(synir)」が二種の木から人間を創成したという記伝(「ギュルヴィ」9)と好対照をなすだろう。

## XI. 世界樹・水(露・泉・海)・運命・ハイムダッルの聴覚・オージンの視覚

- (19) Ask veit ek standa わたしは知っている、ユグドラシルという名の  
 [E] heitir Yggdrasil, トネリコの巨樹が、  
 hár baðmr, ausinn ほの白くよどむ水に濡れて  
 [a] hvíta auri. 聳え立っていることを。  
 Þaðan koma döggar, そこから数知れず露が生じ



þærs í dala falla,	それらは落ちて谷間へ降りてゆく、
[ I ] stendr æ yfir grœnn	ウルズの泉の上には
[ b ] Urðar brunni.	大樹が <u>つねに緑なし</u> 聳えている。
(45) Leika Míms synir,	ミームの息子たちは遊びに興じ、
[ b ] en mjötuðr kyndisk	ついに <u>運命</u> が点火される、
at inu galla	<u>鳴りわたる</u>
[ c ] Gjallarhorni;	<u>ギャラルホルン</u> （「鳴り響く角笛」）に <u>応えて</u> 。
hátt blæs Heimdallr,	角笛を空にかざし、
horn er á lofti,	ヘイムダッルは高らかに鳴らす、
mælir Óðinn	<u>ミーム</u> （ <u>ミーミル</u> ）の <u>頭と</u>
[ e ] við Míms höfuð.	オージンは語り合う。
Skelfr Yggdrasils	<u>聳え立つトネリコ</u>
[ E ] askr standandi,	<u>ユグドラシル</u> は打ち震える、
ymir it aldna tré	その老木は呻吟の声を発する、
en jötunn losnar.	して巨人は解き放たれる。

19節の「ほの白くよどむ水に濡れて」という語句は、「数知れず露が生じ」という表現と共鳴し合っている。原初の虚無ギヌンガガブに落ちて、やがて巨人ユミルと原牛アウズフムラを生んだ「いのちの水滴」(kviku-dropi)を連想させる(『生と死』54)。拙著で詳論したように、北欧神話の宇宙創成論では、泉、河川、霜、氷、水蒸気、水滴、あるいは乳の川など、総じて変容する「水」のイメージが連続していた(『生と死』46-56)。そうすると、19節の「ほの白き水・露・泉」などの語句は、「水」(要素[a])に一括しておいた方がよさそうだ。「いのちの水滴」から生まれたユミルは、霜巨人の始祖である。彼が「眠っていて汗をかき」、その左腕の下から霜巨人族の男女が生まれたという。19節の「水」の表現要素と、45節「巨人は解放される」の一文は連関しうる

かもしれない。世界樹の根元にあるウルズのbrunnr「泉」が、次の20節ではsar「海」と表記されている。前者は「海」（要素[F]）の変異型とみなしうるが（水野1998）<sup>69</sup>、むしろ広義での「水」のテーマの中で包括的に捉えた方がよいだろう。そして、「聳え立つ」トネリコの世界樹を並列して描くことによって、「水と樹木」（要素[a・E]）という比較的単純な連想が働いている。

(20) そこから、多くのことに知悉した

三人の乙女たちが、

[Y] 訪れて来る。

[E・F] 樹下にひろがる、かの海から発して。

[b] ひとりはウルズ、

他はヴェルザンディという名で、

—彼女たちは木片に彫り刻んだ—

第三の者はスクルドの名で呼ばれた。

彼女たちは人の子らのために

かずかずの法を取り決め、

いのち（リーヴ）を選び出し、

[b] 運命を告げ知らせるのだ。

19-20節の連関については、拙稿ですでに注解を加えた。

「そこから数知れず露が生じ」という表現は、次節の「そこから乙女たちが訪れ来る」という表現と並列に置かれうる。いわば、「それらは落ちて谷間へ降りてゆく」と記されたように、döggvar「(数えきれない) 露」は、まぎれもなく「ウルズの泉」を満たすものとなるのだが、その泉から発して「運命」を告知する「乙女たち」がやって来る、という相関関係が認められよう。そのことは、露が「生ずる」のも、乙女たちが「訪れ来る」

のも、同一の動詞komaで表わされていることから明らかだ。

8節で詠まれていた「おそろしく頑強な、三人の巨人の娘たち」の来訪と、「多くのことに知悉した三人の乙女たち」(20節)の来訪は、語りの上で相互に連想を惹き起こすだろう。前者は「強力」、そして後者は卓越した「知恵」を表象している。女巨人たちの来訪によって、神々にとっての樂園時代は終焉を告げたのに対して、運命の三女神の来訪によって、人間社会の「法と秩序」が確定し、一人ひとりにlif「いのち、人生」が割りふられることになった(拙論2004)<sup>70)</sup>。

したがって、「露」が「生ずる」ことと、「運命」(要素[b])の三女神が「訪れくる」ことが連関されている。当然、これら三女神の来訪は、既述した8節の「三人の女巨人の来訪」の語り(要素[Y])と合致している。つまり、またもや「異人来訪」の図式が、円環の内部にまで浸透している。

トネリコは実際には落葉樹であるにもかかわらず、19節では理念的にあらゆる生の根源を表徴するかのように、ウルズ(運命)の泉の上に聳える「常緑」の樹(要素[E・I])として歌い上げられている。それに対して45節においては、「その老木」の震動そのものが、ラグナロクの時が近いことを象徴的に物語っている。ちなみにaldar rök「(人間や神々の住む)世界の滅び」(「ヴァフスルーズニル」39)はラグナロクとほぼ同義だが<sup>71)</sup>、「巫女の予言」では、音響のイメージを連続させることによって、ラグナロクが迫ることへの警鐘を打ち鳴らしている。まず最初に「女巨人の牧夫」エッグセールがかき鳴らす豎琴(41節)に始まり、フィヤラルルやグッリンカムビという名の雄鶏たちの鳴を告げる声(42節)、冥府の番犬ガルムの猛々しい吠え声(43節)、そして極めつけはヘイムダッル神が「高らかに鳴らす」角笛ギャラルホルンの奏音だ(45節)。この一大音響が発せられるとき、mjötuðr「推し量るもの」としての「運命」に「点火される」というのだ(「略注」46)。したがってユグドラシルが「呻吟の声を発する」というのも、ほかならぬ「世界の滅び」のときが近

いことの暗示となっている。迫り来る運命的な出来事を告知するとき、これら一連の「音響」を要素 [c] に設定しておく。

「トネリコの巨樹が、ほの白くよどむ水に濡れて聳え立っている」(19節)、という巫女自身が思い描く原初的な風景は、そのユグドラシルが「打ち震えて呻吟の声を発する」(45節)という聴覚的な映像と緊密に連関されており、一連の語りの上での円環を構成している。同じ世界樹でありながら、前者が「つねに緑なし聳えている」のに対して、後者は「その老木」と呼ばれている。同様にオージンも *inn aldni* 「かの老いたる者」と称されている(28節)。ラグナロクに呼応して、世界樹はオージンとともにあたかも「終わり」の時を迎えるかのような(拙論参照)<sup>72)</sup>。加えて45節は意味内容の上で、27節と共鳴し合っている。

27	<i>Veit hon Heimdallar</i>	かの女は知っている、ヘイムダッルの
	[c] <i>hljóð of folgit</i>	響き聞こえるものが隠されてあるを、
	<i>und heiðvönum</i>	輝く空と慣れ親しむ
	[E] <i>helgum baðmi,</i>	聖なる樹の下に。
	<i>á sér hon ausask</i>	かの女は見る、流れが <sup>たぎ</sup> 滾り逆巻き
	[a] <i>aurgum forsi</i>	戦死者の父の抵当(オージンの目)より発し、
	[d] <i>af veði Valföðrs.</i>	濁れる水飛び散る滝となりゆくを。

*Vituhér enn eða hvat?* おのおの方、さらに知るや、それとも如何に？

多元的な「水」の要素 [a] は、ここでは「滝」に具現化されており、19-20節と同様に、世界樹の映像と共起している。

「戦死者の父の抵当」(27節)という語句は、ミーミルの泉の「知恵の水」を飲むために代償として与えられた「オージンの目」をさすが、同時に、そこから「発し」て「滝となりゆく」と語られているからには、「オージンの目」が隠されてあるミーミルの泉を示唆する語法であろう。部分でもって全体を表

現するsynecdoche (提喩) と呼ばれる修辞技法である。つづく28節では、ミーミルは「朝の訪なうたびごとに蜜酒を飲む」と記され、ミーミルの「知恵の水」は「蜜酒」と同一視されている。いずれにせよ、45節と同じく、ミーミルを仲介としてヘイムダッルの「聴覚 (奏音)」とオージンの「視覚」が並列的に捉えられている<sup>73)</sup>。

巫女がオージンに語りかけた言葉の一部を引用しておく。

(28) ……「オージンよ、わたしはすべてを知っている、

[d] あなたが何処に目を隠されたかを、  
つとに名高き

[a] ミーミルの泉に。  
ミーミルは朝の訪なうたびごとに  
蜜酒を飲む、

[d] 戦死者の父の抵当 (オージンの目) から ……

さて、古ノルド語hornは「角笛」と「角杯」の両方の意味をもっているが、27節では「角笛」のことを婉曲にhljóð「聴音、響き聞こえるもの」と呼び、ギャラルホルンという名のまさに「鳴り響く楽器としての角笛」をさしている。不思議なことにhljóðには、聴衆に静粛を求めるときの「沈黙」という意味もあり、「巫女の予言」の冒頭においてこの語が用いられていた<sup>74)</sup>。「静粛をわたしは求めたい、あらゆる尊き族、身分の高き者も低き者もひとしくヘイムダッルの未裔なる者に対して」と。

巫女は詩歌を吟詠するに際して、聴衆にいわばhljóð「静聴」を促しているのだが、その聴衆は身分の上下を問わず「ひとしくヘイムダッルの未裔なる者よ」と呼びかけられている。別稿でも述べたが、ヘイムダッルの角笛が高らかに吹き鳴らされるのは、ムスベッルの魔の軍勢が襲来する時まで待たねばならない (45節)。警鐘を告げ知らせるはずの角笛は、その然るべき時までミーミ

ルの泉のなかに隠されたまま hlj6ð 「沈黙」を強いられるというわけだ（拙論参照）<sup>75)</sup>。

対照的に45節では、ヴォルズ・ゴザ「神々の見張り役」としてのヘイムダッルが、ギャラルホルンを「高らかに鳴らす」と歌われている。ミームという名は通常、ミーミルと同定されてきたが、U・ドロンケはヘイムダッルと同一視している<sup>76)</sup>。その場合、「ミームの息子たち」という言い回しは、ヘイムダッルを始祖と仰ぐ奴隷、農民、諸侯を表わし（「リーグの物語歌」）、「人間の種族」を意味すると説かれているが、語りの流れの上では相当に無理がある。よく引用される有名な話だが、ヴァンたちが、ミーミルの首をはね、その頭部をアース側に送りつけてきたとき、オーズンは、その頭に防腐剤を塗りたくり、何度も呪文を唱え、ついには大いなる靈力を吹き込むと、「その頭が彼に話しかけ、彼のために多くの神秘的な話を語りだしてくれた」という（「ユングリンガ・サガ」4章）<sup>77)</sup>。少なくとも45節の「ミームの頭」は、やはりオーズンに数々の神秘的な話を語って聞かせた「ミーミルの頭」（要素[e]）と解さざるを得ない（『生と死』80）。おそらく上記45節でも、ラグナロクを目前にしたオーズンは、予言や助言となる「神秘的な話」を聞き出すために、「ミーミルの頭」に相対しているのだろう。「ついに運命が点火される」という表現は、まさに「神々の滅びる定め」の時が近いことを意味している。

いずれにせよ、本来ならば「響き聞こえるもの」となるはずのヘイムダッルの角笛が、「沈黙」したままミーミルの泉のなかに「隠されてある」状況と、「オーズンの目」が見る機能を喪失したまま、同じ泉のなかに沈められてあるという状況は相関をなす（27節）。前者のヘイムダッルの hlj6ð 「響き聞こえるもの」は、先述した「音響・奏音」の表現要素 [c] に組み込むことが可能だ。対照的に、「戦死者の父の抵当」と称された「オーズンの目」を要素 [d] に定めておく。いわば「ヘイムダッルの奏音」と「オーズンの片目」はいずれも、それらを隠し蔵した「ミーミルの泉」（要素[a]「水」）そのものの暗喩となり、両神の「耳」と「目」がミーミルの「頭」と緊密に連合されていることも明ら

かだ。

加えて、「最高の賢者」（「ユングリング・サガ」4）と称されたミーミルのhöfuð「頭」が、神界のhöfuð「主長」なるオージンに数々の秘密を語り出す、という言葉の遊戯がひそんでいるだろう。いわば、ヘイムダッルの「聴覚」とオージンの「視覚」のそれぞれの力能は、「隠し場所」としてのミーミルの泉と、「秘密の暴露」としてのミーミルの頭を介在することによって、ひとつに統合され、ラグナロクの運命を予知し、そこから脱却するためのすぐれて鋭敏な感覚へと変貌をとげてゆくのだ。そうした真義は、27節と45節の相関性をふまえて初めて把握できると思う。いずれにせよ45節は12行から成るものの、これが単独で、前半部の19-20節および27-28節に対応しているのは、円環詩法の見地からすれば、著しくバランスを欠いている。創作当初の原詩においては、45節の前後に2-3の詩節が置かれていたことを推定しうるが、もしくは、ウーティ・セタの呪術を執行中の巫女の前に突然にオージンが割り込んできたことを語る28節は、後代に挿入されたのかもしれない。

## XII. 馬を駆るヴァルキュリヤ・川を渡る亡者の群れ

(30) かの女（巫女）は見た、遠くから

ヴァルキュリヤたちがやって来るのを、  
神々の住まう地をめざし、

[f] いましも馬を駆りてくる姿を。

[b] スクルドは楯をたずさえ、

スコグルがそれに続き、  
グン、ヒルド、ゴンドゥル、

それにゲイルスコグルたちだ。

[f] いましも馬を駆り

[G] 平原を渡りくるヴァルキュリヤたち、

[g] 軍勢の主長（オージン）に仕える乙女たちの

名をここにあげてみた。

(38) かの女は見た、そこで

[j] 偽誓を犯したものや

凶悪な殺人者たちが、

それから耳元で秘密ささやく人妻を

かどわかした者が

[h] その激流を難儀して歩き渡るのを。

[i] そこではニズホッグが

[j] 死せる者たちの体を吸い尽くし

狼は男どもを貪り喰っていた。

おのおの方、さらに知るや、それとも如何に？

Yggdrasillの名は「ユッグの馬」を意味し、その第一要素Yggriは「恐るべきもの」の意で、自己犠牲の神オージンの別名である。Hanga-týr「絞首者の神」とも称されたオージンは、みずから槍に傷つき、「風吹きすさぶ大樹」に身を吊って、死と再生の自己犠牲を執行したとされる（「ハーヴィ」138；『生と死』110）。古ノルド語 *ríða* や古英語 *ridan* は「馬に乗る」を基本義としながらも、絞首に処せられた者たちの体が「揺れる」さまを表現しえた。さらに種々の用例を検討した結果、現世において「馬や船に乗って揺れながら進み、旅する」ことは、「馬に乗って死界へ旅立つ」ことと詩歌のなかで緊密に連合されていた。典型的にはオージンは八本足の馬スレイプニルに乗り、この世とあの世の来往を繰り返す神であった。オージンの自己犠牲の樹としてのYggdrasillが「ユッグ（オージン）の馬」を意味した由縁である（拙論参照<sup>78)</sup>。

さて、アースの神々は、世界樹の根の下にある「ウルズの泉」において「判決を下しに行く」ために、「毎日、馬に乗る」とされ、10頭の馬の名を列挙した箇所がある（「グリーンニル」30）。ただし、ソール神のみは、同じ所へ行



くゆくのに幾つもの川を「毎日、歩いて渡る」とされる(同29)。この箇所では、10頭の馬に、オージンの馬スレイブニルが含まれていないが、「ギェルヴィの幻惑」の記載では、オージンの馬を筆頭にして合計11頭の馬の名があげられ、最後の十二番目に数えられるはずのバルドルの馬については、「(殺された)彼の亡骸とともに焼かれた」と付記されている(15章)。これらの不思議な伝承についてはすでに分析を試みた<sup>79)</sup>。

上記30節で、「かの女」すなわち巫女が幻視のなかで「見た」ものが、またしても *ríða* 「馬に乗る」(要素 [f]) 6名のヴァルキュリヤの姿であったというのはすこぶる意味深長だ。Herjan 「軍勢の主長」オージンに「仕える乙女たち」が馬を駆るということは、近々に戦士クラスの誰かが死ぬことを暗示している。「平原」の訳語を与えた *grund* は、「広大なる大地」(古英語 *eormen-grund*) の意味合いを有し(水野「中つ国」)<sup>80)</sup>、上記の視覚的な映像は、やがて発生するバルドルの殺害という悲劇が、神界をふくむ宇宙的な滅びにつながることを暗示している。その事は、ヴァルキュリヤたちの中に、「然るべき未来」を表徴する運命女神スクルドがいることから明らかだ。

それに対して、同じ巫女が幻視する映像でありながら、39節の「激流を難儀して歩き渡る」者たちはすべて匿名である。この世で様々な罪を犯した死者の群れ(要素 [j]) が、毎日のように死界の川を *vaða* 「歩き渡る」(要素 [h]) 情景であろう。アース神の中でただ一人ソールのみは、ウルズ(運命)の泉のほとりにある、神聖不可侵の「神々の法廷」(*dómstaðr*) へ向けて毎日、川を *vaða* 「徒渉する」のだが(「ギェルヴィ」15)、39節の描写はあたかもその一種のパロディであるかにみえる<sup>81)</sup>。

最近、「巫女の予言」のなかにも、生と死および運命を司る月に秘められた *megin* 「大いなる力」(5節)のテーマが脈打っていることを論及し、*Niðhögg* を「暗夜(新月)のさなかに討つもの」と解した。詳細は省くが、死者の体を「吸い尽くす」ニズホッグ(要素 [i])の所作は、降雨と死を司る「月の魔力(メギン)」を表徴していると結論づけた。その一節を引いておく。

次節（39節）で、フェンリル狼の末裔の中から、「月を喰うもの」が出現することが予言されている。ちなみに「ギェルヴィの幻惑」12章によれば、その狼はマーナガルム「月の魔犬」の名で呼ばれている。まさに「暗月」の闇の中で、ニズホッグ竜が死体を「喰い尽くし」、狼が男たちを「貪り喰う」という、死界における食欲な食の映像が、次節では「月を喰う狼」という宇宙論的なイメージに変換されている<sup>82)</sup>。

繰返しになるが、オージンに仕えるヴァルキュリヤ（「戦死者を選ぶもの」の意）たちが馬に乗り大地を疾駆する姿は、バルドルの死の予兆となっている。バルドルを殺す「下手人」（hand-bani）は盲目のホズだが、その「殺害の教唆者」（ráð-bani）はロキだ（『生と死』207）。やがてロキがバルドル殺害に関与することは、ロキ自身の口からバルドルの母フリッグに向けて発せられた言葉の中にほのめかされている。

ロキは言った。

「フリッグよ、お前は、

この私がまねく災厄の話を

私にもっと語って欲しいというのか？

お前がこの先、館に

馬に乗ってやって来るバルドルの姿を拝めなくなるのは、

この俺様のせいだ。」

（「ロキの口論」28）

いわば、巫女のまなざしの中に、「遠くから」ヴァルキュリヤたちが「神々の住まう地をめざして」馬に乗って「やって来る」のが見えたのだが（30節）、その幻視は皮肉めいたことに「馬に乗ってやって来るバルドルの姿を拝めなくなる」という、神界に降りかかる悲劇をも遠望することになるのだ。

ウルズの泉の神聖なる裁きの庭へ向けて毎日疾駆する神々の中であって、例外的にただ一人、川を徒歩で渡りゆくソールの姿と、近々に「馬に乗る姿が見られなくなる」バルドルはどこか似通うところがある。日々、dómr「裁き」の場に馳せ参ずる神々の集団と、死界への川を徒歩渡る死者の群れが、相互連関されているのは明らかだ。罪を犯した死者たち(要素 [j])の体は、やがてニズホッグ竜に「吸い尽くされる」という懲罰いわば「裁き」(要素 [b])を受けることになる。

### XIII. 中核の主題

「巫女の予言」という詩歌は、こうして前半部と後半部の各詩節において相互に対応し、共鳴する表現要素やテーマを配し、次に紹介する中核的な主題[X]を中心とする円環構成を形づくっており、全体として[A-B-C…X…C-B-A]の配列形式を成している。

(31) Ek sá Baldri,	わたしは見た、
blóðgum tívur,	オージンの息子バルドルには、
Óðins barni,	血に染まりゆく神としての
[b] <u>örlög folgin;</u>	<u>運命が定められてあることを。</u>
stóð of <u>vaxinn</u>	野にはひときわ高く、
völlum hæri	<u>か細くもいと美しく、</u>
<u>mjór ok mjök fagr</u>	<u>宿り木が</u>
[D] <u>mistilteinn.</u>	<u>生い育っていた。</u>

冒頭の「わたし」は、詩的陶酔のなかでバルドルの殺害を不可避の「運命」として見定めた巫女をさしている。問題の宿り木がヴァルホルルの西に生息しているという秘密を暴露してしまったのは、母フリッグであった。ロキはそれ入手して神界に戻り、盲目の戦士ホズに手渡し、「射る」べき方向を教える

したのだが（「ギェルヴィ」49）、ホズが「それを射放った」とき、宿り木はバルドル必殺のharm-flaug「災いの飛矢」と化したという。

(32) いかにも細きと見えた

その枝から危機をはらむ  
災いの飛矢<sup>しゅつたい</sup>が出来し、  
ホズがそれを射放った。  
やがてバルドルの兄弟が  
生を享け、  
オージンの息子なるその者（ヴァーリ）が  
生後一夜にして復讐を敢行した。

巫女が予見した「血に染まりゆく神」としてのバルドルの殺害は、こうして実現した。バルドル殺害神話については、種々の見地から約15編の論稿を公表済みなのでここでは詳説を控え、一論からの引用にとどめたい。

バルドル殺しのホズに対して、オージンとリンドの間に生まれたヴァーリが、わずか「生後一夜にして」復讐をとげたという（「バルドルの夢」11）。32節では、ホズがバルドルめがけて宿り木を「射る」（skjóta）行為と、ヴァーリがホズに相対してこれを「討ち果たす」（vega）行為が、同じnam「敢行した、着手した」という動詞（nemaの過去形）で連結されている（水野「略註」41）。

敵に報復するには、あたかも同じ行為で報いるべきとでも言うかのような語り口である。31節の予言的な語り、32節ではすでに発生した過去の出来事と化している。バルドル殺害を「予見した」巫女が、同時にその悲劇の顛末をも語っているのだが、その未来と過去をつなぐ結節点にあるものは、野に「ひ

ときわ高く、生い育っていた」宿り木（要素 [E]）であろう。あたかも、その「美しき」宿り木を一種の依り代となして、巫女は未来に起こるべきことを予見し、過去の伝承事実を統握しているようにみえる（近稿参照）<sup>83)</sup>。バルドルの死のあとに、ホズへの復讐者ヴァーリの記述が続き、ついで母フリッグの悲嘆が描かれるのはごく自然な道理である。

(33) かれは手を洗いもしなければ

髪を梳ることもなかった、

バルドルの怨敵を葬りさり

火葬の薪のもとに運ぶまでは。

その間にフリッグは

フェンサリル（「沼沢の館」）にて

ヴァルホッルの惨劇に悲嘆に暮れていた。

おのおの方、さらに知るや、それとも如何に？

「ヴァルホッルの惨劇」は、「戦死者の宮殿」ヴァルホッルの西に生息していた宿り木によって、愛息が殺されたことをさしている。先行する30節にて馬を駆るヴァルキュリヤたちを歌い、何者かの死を予告した上で、バルドルの「殺される運命」へと語りをつなぎ、母神の慟哭を詠むに際して、ふたたびヴァルキュリヤの住まいとしてのヴァルホッル「戦死者の宮殿」の用語を提示している。フリッグの館フェンサリルと、この「戦死者の宮殿」が並列されていることも注目すべきであろう。30-33節の語りの中核の主題を取り巻く円環を構成していることは疑いもない。しかも、31節の「わたしは見た」と34節の「かの女は見た」で語りだされる意味内容は緊密に照応している。「かの女」は、一種の憑依状態のなかで、「わたし」と称する自我を遊離して、現在・過去・未来の時空的な領域を自在に遍歴する巫女をさしている（「略註」28）。

(34) かの女は見た、囚われ人が

フヴェラルンド（「沸き立つ釜の森」）に横たわるを。

それは災厄を好むロキの

姿によく似た者。

そこにシギユンが

おのれの夫のそばにたたずむが、

幸せとは縁遠い。

おのおの方、さらに知るや、それとも如何に？

ここでは「ロキの姿によく似た者」という曖昧な表現となっているが、続いて妻シギユンの名が置かれることによって、その「囚われ人」がロキ以外の何者でもないことが判明する仕組みだ。「幸せとは縁遠い」シギユンの存在は、フェンサリルにて「慟哭する」フリッグの姿と対応している。それぞれ妻と母の悲嘆を表現し、言うまでもなくロキは、バルドル殺害に関与した罪を背負わされて責め苦を受けている。

「巫女の予言」の中核の主題はしたがって、【バルドル殺害とロキの処罰】であり、それを補佐するものとして【ホズに対するヴァーリの復讐】と【母の慟哭と妻の悲嘆】のテーマが置かれている。別稿において、巫女自身が「この世の生と死と運命を司る女神フリッグの相貌を帯びている」と結論づけ<sup>84)</sup>、さらに「巫女の予言」という名の詩歌は、滅びゆく神々に捧げられた哀歌であると定義づけた（近稿<sup>85)</sup>。その意味でも、詩歌の中核に「血に染まりゆく神」バルドルと「囚われ人」ロキの姿を配し、それぞれの悲劇を嘆くふたりの女性を並置するという詩法は、きわめて劇的な効果を生みだしているといえよう。

#### XIV. 円環詩法と異人來訪のテーマ

以上の論述に従い、対応する詩節番号にそれぞれA, B, C, …などの同一の記号を付して図示してみる。中核の主題を【X】と表記する。そして、対応・

共鳴・照応する表現要素の系列を鉤括弧[ ]で示すことにする。

- A : (1) [静粛－ヘイムダッルの末裔－戦死者の父 (オージン)]  
B : (2) [生まれる－養い育てる－hairmar「世界」－推し量る樹]  
C : (3) [住む－海－大地－上天－草]  
D : (4) [息子たち－土塊－ミズガルズ－太陽－館－地表－緑の草]  
E : (5) [太陽－月の友輩－天の縁－太陽－館－星々－月]  
F : (6) [支配神－来臨する－裁きの座]  
G : (7) [アースたちの邂逅－イザヴォッル]  
H : (8) [草地での盤戯－黄金の駒－三人の女巨人の来訪]  
I : (9)・(10) [支配神－来臨する－裁きの座－侏儒の創成]・[土－侏儒たち (人の似姿) の創成]  
J : (17) [三名のアース神の旅－海辺－樹木－運命を知らぬもの (最初の間)]  
K : (19-20)・(27-28) [世界樹－よどむ水－常緑－運命の泉－三人の乙女たちの来訪－樹下－かの海－三人の運命女神－運命]・[響き聞こえるもの (聴音)－聖なる樹－濁れる水飛び散る滝－戦死者の父の抵当 (オージンの目)－目を隠した－戦死者の父の抵当 (オージンの目)]  
L : (30) [ヴァルキュリャー馬を駆る－スクルド (運命女神)－平原－軍勢の主長 (オージン)]  
[X] : (31-32) [「血に染まりゆく神」バルドル－運命－宿り木－ホズの凶行－ヴァーリの復讐]  
(33-34) [母フリッグの慟哭－ロキの処罰－妻シギユンの不幸]  
L : (38) [罪人の群れ－激流を徒歩渡る－ニズホッグ竜－死者の体]  
K : (45) [運命－鳴りわたるギャラルホルン－ヘイムダッルとオージン－ミームの頭－世界樹]

- J : (48) [船(海の木) - 海 - 三兄弟の襲来 - (神々と人間の種族の滅び)]  
 I : (49) [神々の会議 - 岩壁、岩の扉 - 侏儒たちのうめき声]  
 H : (58) [黄金の駒 - 草むら - 神の族]  
 G : (57) [アースたちの邂逅 - イザヴォッル - 運命的な出来事 - 古き秘蹟]  
 F : (62H) [強大なるもの - 来臨する - 裁きの庭]  
 E : (54) [太陽 - 大地 - 海 - 天 - 星々 - 火炎 - 天]  
 D : (61)・(59) [館 - 太陽 - ギムレー (至上天) - 戦士 - 住む - 至福]・[豊  
 饒 - 住む - 勝利 - 戦死者の神々]  
 C : (56) [海中より大地が - 上空に飛ぶ - 常緑]  
 B : (60) [息子たち - 住む - vind-heimr 「風の住み処」 - ト占の枝]  
 A : (62) [(巫女は) 沈みゆかん - 激戦の野を飛びゆく 竜ニズホッグ]

このように「王室写本」の詩節区分によって「巫女の予言」を分析してみた。相互に対応・共鳴する表現要素が、一つまたは二つの詩節の内部で連関的な一列を形づくっており、詩歌の前半と後半に上記A～Lの詩的系列が認められた。【殺されるバルドルとロキの処罰】が中核の主題であり、【それぞれの母と妻の悲嘆】のテーマと相関をなしていることも明確に読み取れた。詩歌全体の様相を見るかぎり、円環構造があることは疑いない。ただし同時に、とくに後半部の詩節において円環の同心円に乱れが生じている。前半の詩節との対応を比べると、後半部では原詩に存した円環が崩れ、50-61節の順序が入れ替わった可能性が大きい。それに対して、後半の38-49節は比較的きれいな円環を形づくっているものの、前半部では系列K(19-20節と27-28節)が負担過重となっている。

原詩の推定上の創作年代(1000年前後)から「王室写本」の成立までの約270年の間に、いわばその伝承のプロセスで、円環の揺れと崩れが生じたことを想定せざるを得ない。いずれにしても今後、「巫女の予言」の語りの分析や文芸批評を進める際には、上の指標に基づき、まずは原詩の円環を再構築する試



みが必要となってくるだろう。

さて、このように円環詩法の原理に基づき、対応・共鳴する表現要素の系列が幾つもの同心円を描いて中核の主題を取り巻いている。だが、一方では、語りの進展に沿って、連鎖的に繰り返し表れる一つの基幹的テーマが認められた。それは、神々の黄金時代を終焉させた「三人の女巨人たちの来訪」（8節）に始まる、「異人来訪」のテーマ（要素[Y]）である。語りの順序を追えば、「三人のアースたち」が侏儒の種族を離れて海辺に「やって来た」（動詞komaの過去形）ことは、人間の創成を導き（17節）、「三人の乙女たち」が訪れて来て、人の子らに「運命を告げ知らせ」ている（20節）。そして、ヘイズという名の巫女が「家々を訪れ」てセイズ（呪術）を駆使したとき、女たちは「官能的な歓び」にふけったという（22節）。これら異神または異人の「来訪」を表わす動詞はすべてkomaである。詩歌の吟詠者である巫女がウーティ・セタの呪術を執行中に、「老神」オージンが「来訪し」て彼女の眼を覗き込んだともいう（28節）。また、そのオージンに仕えるヴァルキュリヤたちが馬を駆って「やって来る」という動詞も、当然のことながら同じくkomaだ（30節）。

その後、例の【中核の主題】が提示されて、komaで表記される「異人来訪」のテーマは消え失せている。それが、ギャラルホルンの角笛が高らかに鳴り響き、「ついに運命が点火される」と語られるや、「恐るべき異人たち」の襲来が相次いで発生している。巨人フリュムは「東から馳せ参じ」（47節）、同じく東から、ロキが「舵取りをつとめ」て、ムスペルの民を乗せた船が海を越えて「やって来る」（48節）。そして、魔物スルトは燃える剣をもって「南から攻め寄せる」（50節）というふうに。

オージンは「ロフト（ロキの別名）の友」とも称され、ロキとは血盟の義兄弟の関係にあった（「ロキの口論」9）。したがって、すでに旧稿で論述したように、客人（または異人）款待の原則に照らせば、ロキに残酷な業罰を加えたことは、まさに「客人款待神としてのオージン」を筆頭とするアースの神々に対して<sup>86)</sup>、いずれ処罰が下されることを意味している。それ故に、ラグナロ

クにおける神々を滅ぼす魔の軍勢の襲来は、ロキをふくめた「恐るべき異人たち」による大逆襲と解しうる（旧稿参照）<sup>87</sup>。

この辺りの異人の大襲来を表わす動詞にはkomaとfara「旅する、遠征する」が併用されているが、ヴィーザルやソールなどの神々がこれら宿敵を迎え撃つために「馳せ参ずる」という動詞は、またもやkomaで表記されている（52-53節）。しかも、ひとたび世界が滅び、その後に「海中よりふたたび」大地が「浮かびくる」という動詞ばかりか（56節）、死界からバルドルが「蘇えってくる」だろう（59節）、という動詞もkomaである。

こうして詩歌全体を通観すれば、最終節において、「闇なす竜」ニズホッグ（「新月の中で切り払うもの」の意）が、ニザフィヨル「新月の丘」の下方から、空を飛んで「来る」という動詞がやはりkomaであるのは決定的な意義を有するだろう。既述したように、生と死と運命を司る月のmegin「魔力」が、この飛竜に具現化しているように思える<sup>88</sup>。そして、「異人（異神）来訪」というダイナミックなテーマが、直線的な語りの連鎖となって「巫女の予言」の詩的円環をまさに突き抜けているのだ。その根幹主題は、詩歌の中核にひそむバルドル殺害神話をもまぎれもなく貫通している。というのは、折りに触れて論及したように、その殺しの教唆者ロキはいわば神界の異人であり、mann-hringr「神々の輪」の「外」に立っていた下手人ホズは神界のアウトサイダーにほかならないが故に（『生と死』204-8）。しかも「災いの飛矢」と化した宿り木は、ロキに代表される、まさに神界に寄食する異人の象徴であるばかりか、「若く」（「ギェルヴィ」49）で「美しい」と言われたその枝は、バルドル自身の不死性と異人性を表徴しているとみなしうるからである（拙論参照）<sup>89</sup>。

[付記]

本稿は次の二つの口頭発表を基にしているが、ここでは対象を「巫女の予言」に絞った。

1) 「エッダ詩にみるRing compositionと語りの円環構造」(日本中世英語英文学会第18回全国大会: シンポジウム「頭韻詩再考」(2002年12月7日, 広島大学)。2) “Ring Composition and Circular Narrative Structure in Eddic Poems.” The 12th International Saga Conference (Univ. Bonn, Jul. 28-Aug. 2, 2003). なお、2) に関しては拙論(同一題名)が当学会誌Preprintに掲載された(注15参照)。また、本文中の引用作品「ギュルヴィの幻惑」(Gylfaginning)は「ギュルヴィ」と略記して章数を添えた。次のエッダ詩については、それぞれ右記の略語を使用し、詩節番号を付した。

「ハーヴィの語り」: 「ハーヴィ」 「ヴァフスルーズニルの語り」: 「ヴァフスルーズニル」  
「グリームニルの語り」: 「グリームニル」

註

- 1) シーグルズル・ノルダル『巫女の予言—エッダ詩校訂本—』菅原邦城(訳)(東海大学出版会、1993)。115—16. Sigurður Nodral, *Vöuspá* (Reykjavík: Helgafell, 1952) 15—16.
- 2) Hermann Pálsson, *Völuspá: The Sibyl's Prophecy*. (Lockharton P, 1996) 44.
- 3) Pálsson, 43.
- 4) ノルダル, 63—66. Nordal, 178.
- 5) Ursula Dronke, ed. *The Poetic Edda*: vol. II, Mythological Poems (Clarendon P, 1997).
- 6) Guðni Jónsson, ed. *Eddukvæði* (Íslendingasagnaútgáfan, 1954).
- 7) John D. Niles, *Beowulf: The Poem and Its Tradition* (Harvard UP, 1983) 152.
- 8) John O. Beaty, “The Echo-Word in Beowulf with a Note on The Finnsburg Fragment,” *PMLA* 49 (1934): 365—73.
- 9) W. A. A. van Otterlo, “Untersuchung über Begriff, Anwendung, und Entstehung der griechischen Ringkomposition,” *Mededelingen der Nederlandsche Akademie van Wetenschappen*, n. s. 7, no. 3 (Noord-Hollandsche Uitgevers Maatschappij, 1944). 但し未入手につき参照していない。

- 10) Cedric Whitman, *Homer and the Heroic Tradition* (Harvard UP, 1958). Stephen Bertman, "The Telemachy and Structural Symmetry." *TAPA* 97 (1966): 15–27.
- 11) 水野知昭 「「ヴォルンドの歌」にみる円環詩法」『信州豊南短期大学紀要』第20号 (2003): 67–107.
- 12) H. Ward Tonsfeldt, "Ring Structure in Beowulf," *Neophilologus* 61 (1977): 443–52.  
John D. Niles, "Ring Structure and the Structure of Beowulf" *PMLA* 94 (1979): 924–35.
- 13) Joseph A. Dane, "The Notion of Ring Composition in Classical and Medieval Studies," *NM* 94 (1993): 61–67.
- 14) 註11) 水野75.
- 15) Tomoaki Mizuno, "Ring Composition and Circular Narrative Structure in Eddic Poems." In: *Scandinavia and Christian Europe in the Middle Ages*. Papers of The 12th International Saga Conference. Rudolf Simek & Judith Meurer, eds. (Hausdruckerei der Universität Bonn, 2003): 382–92.
- 16) 註11) 水野106–7.
- 17) Gustav Neckel, ed. & Hans Kuhn, rev. *Edda: Die Lieder des Codex Regius nebst verwandten Denkmäern*. Carl Winter. 1962. 谷口幸男 (訳) 『エッダー古代北歐歌謡集』(新潮社、1973)
- 18) 以下、本文引用の際の校訂と綴り字は、主に注6) Guðni Jónsson, 1–22に従ったが、解釈上、註5) Dronke, 7–24の読解をよとした場合がある。
- 19) 水野知昭 「「巫女の予言」抄訳と略註」篠田知和基 (編) 『神話・象徴・文学』II (楽浪書院、2002): 27–54. 侏儒族の系譜 (11～16節) を除き拙訳を提示して略注を加えた。以下の邦訳は拙訳を引用したが、一部表現を変え、また改訳した箇所もある。
- 20) 水野知昭 『生と死の北歐神話』(松柏社、2002).
- 21) 注19) 水野29.
- 22) 水野知昭 「「巫女の予言」にみる運命と月の思想」松村一男 (編) 『生と死の神話』(リトン、2004) 271–304.
- 23) 水野, 「運命と月の思想」275.
- 24) 水野知昭 「民会と決闘の野原—古ノルド語 *vangr* と *völlr* および *leikr* の考察—」『言語

学論集』7号(東北大学文学部言語学研究室,2002C):17-33.

- 25) エッダ詩の引照・引用は注6) Guðni Jónsson, に拠る.
- 26) 水野, 「民会と決闘」23.
- 27) 水野知昭「滅びゆく神々への哀歌—「巫女の予言」の語りの構造—」『人文科学論集』(文化コミュニケーション学科編)39号(信州大学人文学部,2005)刊行予定.
- 28) Pálsson, 58.
- 29) Pálsson, 60.
- 30) 水野『生と死の北欧神話』, 106-8. 「誕生する」(borinn)と「創成される」(skapa)の概念が緊密に連合されていた根底には、「運命」の観念がひそんでいることを論述した.
- 31) ノルダル, 128-9.
- 32) 水野, 「滅びゆく神々への哀歌」第1節.
- 33) ノルダル, 129.
- 34) Bjarni Aðalbjarnarson, ed. Snorri Sturluson: *Heimskringla*. I, Íslenzk Fornrit 26 (Reykjavík: Íslenzk Fornritafélag, 1941) 167-8.
- 35) 水野知昭「王の犠牲と豊饒: 北欧と日本とギリシアの事例」『人文科学論集』(文化コミュニケーション学科編)(信州大学人文学部)32号(1998): 89-197; 90.
- 36) 水野知昭「古ゲルマンの楽園の原風景」『文化』(東北大学文学会)47巻, 3・4号(1984): 1-23. 楽園の理念的な色は「緑」として1節をもうけて論述, 7-12.
- 37) Pálsson, 90.
- 38) Dronke, 115.
- 39) 註36) 水野「楽園の原風景」, 12. bjöð「土塊」については論及済み.
- 40) 水野, 「楽園の原風景」, 8-11. 同論文でも引用したが, 次著参照: E. Hoffmann-Krayer, ed. *Handwörterbuch des deutschen Aberglauben*. Walter de Gruyter, 1943. cf. “Knoblauch”.
- 41) 水野知昭「古北欧の「流され王」伝説」*The Round Table*. 13号(慶応義塾大学: 高宮研究室, 1998): 135-46. 「平和と豊饒」については139-44.
- 42) 水野, 「楽園の原風景」, 16-18. ギムレーは「火炎に対する防禦」の意で, 優れた戦士が至上天で享受する *ynði* 「至福」に「性的な快楽」が含まれることを論述した.
- 43) 水野知昭「古北欧の「中つ国」と「根の国」」『人文科学論集』(文化コミュニケーション

- ション学科編) 35号 (2001) : 93-119. 「底根の領域」 および「生命と豊饒と至福の根源」としてのgrundとの関連で、バルドルとホズの復活の意義を見定めた (116-7頁).
- 44) Dronke, 67.
  - 45) ノルダル, 139 : 原著57.
  - 46) 註22) 水野, 「運命と月の思想」 殊に289-97.
  - 47) 水野知昭「古北欧の太陽舟と太陽馬車の信仰」 渡辺和子・松村一男 (編) 『太陽神の研究』 下巻 (リトン, 2003) 247-82. ムンディルファリの第二要素-fariは「海ゆく舟人」を意味するので、太陽舟の古代信仰の残滓を推定した (255頁).
  - 48) ノルダル, 261.
  - 49) Dronke, 153 : 87.
  - 50) Margaret Clunies Ross, *Prolonged Echoes: Old Norse myths in medieval Northern society* (Odense UP, 1994) 239.
  - 51) Dronke, 98.
  - 52) Rudolf Simek, *Dictionary of Northern Mythology*. 1984 : Angela Hall, tr. (D. S. Brewer, 1993) 170.
  - 53) 水野, 「民会と決闘」 21-23.
  - 54) Dronke, 120-21.
  - 55) レジス・ボワイエ『ヴァイキングの暮らしと文化』 持田智子 (訳) (白水社, 2001) 81.
  - 56) 水野知昭「漕ぎ手なき舟にて漂うて一海に葬送される王者たち」『人文科学論集』 (文化コミュニケーション学科編) 37号 (2004) : 57-85 : 76.
  - 57) Pálsson, 65.
  - 58) Dronke, 38.
  - 59) ノルダル, 155.
  - 60) 水野, 「漕ぎ手なき舟」 77-79.
  - 61) 水野知昭「来訪神ヘイムダッルと王権の成立」『説話・伝承学』 6号 (1998) : 46-60 : 53.
  - 62) Dronke, 122.

- 63) Sigurður Nordal や Guðni Jónsson ならびに Hermann Pálsson の刊本では前者 (Múspell) の読みを採用し、Gustav Neckel & H. Kuhn および U. Dronke は後者 (Muspell) を採っている
- 64) Jan de Vries, *Altgermanische Religionsgeschichte*. Bd. II, (1956; Walter de Gruyter, 1970) 397.
- 65) Simek, 51.
- 66) Dronke, 147.
- 67) 註43) 水野, 「中つ国」 94.
- 68) 註20) 水野『生と死』, 24; 62-63; 73-75; 140; 314-15等を参照.
- 69) 水野知昭「馬に乗る神々と世界樹トネリコ」『日本アイスランド学会会報』18号 (1999) 28-39; 36. ミクロとマクロの視野は語りの中で相互に変換される。したがって、ウートガルザ・ロキの館でソールが飲み干そうとした角杯の先端が「海」に続いていたという神話は、ミーミルの「泉」に隠されていた角杯の伝承と関連を成していると説いた。
- 70) 註22) 水野, 「運命と月の思想」 278-79. なお、Ilf 「いのち」と veröld 「人が生き、老いてゆく時代」の基本概念については271-77に詳述した。
- 71) 水野, 「運命と月の思想」 285.
- 72) 水野, 「運命と月の思想」 299.
- 73) 註69) 水野, 「馬に乗る神々」 34.
- 74) 註27) 水野, 「滅びゆく神々への哀歌」第3節.
- 75) 註47) 水野, 「古北欧の太陽舟」 264.
- 76) Dronke, 144.
- 77) 註34) Aðalbjarnarson, ed. 12-13.
- 78) 水野, 「馬に乗る神々」 28-31.
- 79) 水野, 「馬に乗る神々」 34-6.
- 80) 水野, 「中つ国」 96-9.
- 81) 水野, 「馬に乗る神々」 34.
- 82) 水野, 「運命と月の思想」 292.
- 83) 水野, 「滅びゆく神々への哀歌」 7節.
- 84) 水野, 「運命と月の思想」 297.

- 85) 水野, 「滅びゆく神々への哀歌」9節.
- 86) 水野知昭「客人款待神としてのオージン」『ユリイカ』2月特集号(青土社, 1997): 138-45.
- 87) Tomoaki Mizuno, "Beowulf as a Terrible Stranger". *The Journal of Indo-European Studies*. 17, No. 1&2 (Washington D.C., 1989) : 1-46; 27.
- 88) 水野, 「運命と月の思想」297.
- 89) 水野知昭「旅する客神ロキの神話—その(1)—」『日本大学工学部紀要』分類B, 28巻(1987): 89-108. 宿り木については91頁. バルドルの異人性については次の拙論参照: 「古北欧「異人による蛇神殺し」としてのバルドル神話」『口承文藝研究』10号(1987): 147-60.